

刺し子と菱刺

津軽・南部の仕事着

青森県立郷土館



ごあいさつ

仕事着を主とした衣服の補強や
保温のための刺子は
日本の各地で
古くから行なわれていました。
それらのなかでいまに残されている
「津軽の刺しこぎん」と
「南部の菱刺」は
その美しさにおいて、
刺子のなかの双璧といわれております。
藩政時代津軽・南部の乙女たちは、
農民に許された唯一の衣料であった
麻布に木綿糸をもちい、
直線状に布目をひろう単純な法則から、
複雑で多様な幾何学模様の
意匠をたくみに生み出しました。
その「刺しこぎん」と「菱刺」では、
刺す糸目のひろい方からくる模様の展開や
麻布と刺糸の色などに相違があり、
これをはぐくんできた風土の
差異からとみられる
手法の違いはありますが、
いずれも厳しい農民の暮らしの中に育った
美と知恵の所産として、
今日的な角度からますます評価が
高まってきております。
今回は所蔵者のご好意により
逸品ぞろいの刺しこぎんとともに
これまで紹介されることの少なかった
菱刺の優品を多数展示して、
刺子にみられる郷土のすぐれた
民間伝承の美を
ご紹介することにしました。

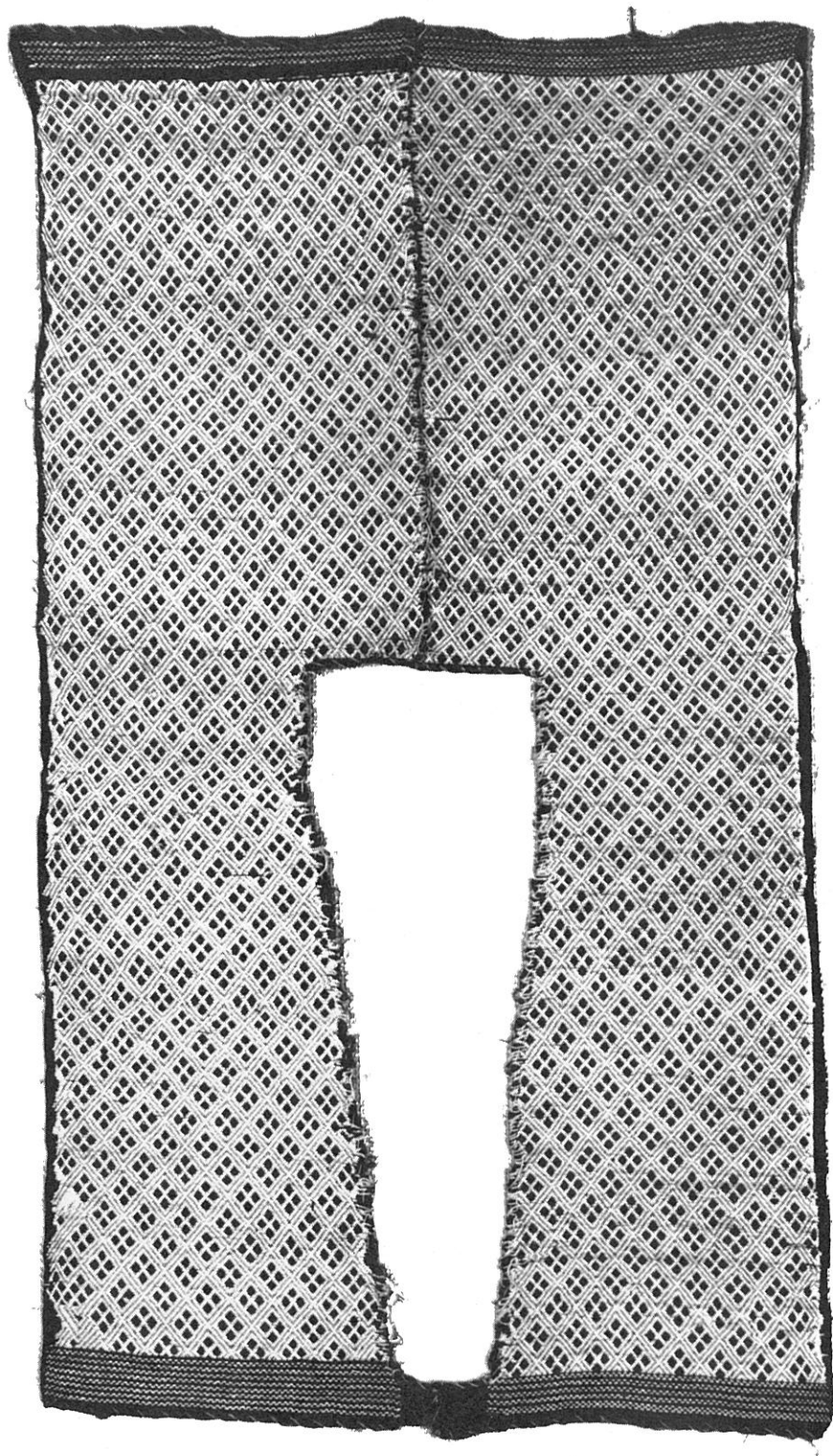
昭和51年10月 青森県立郷土館

目 次

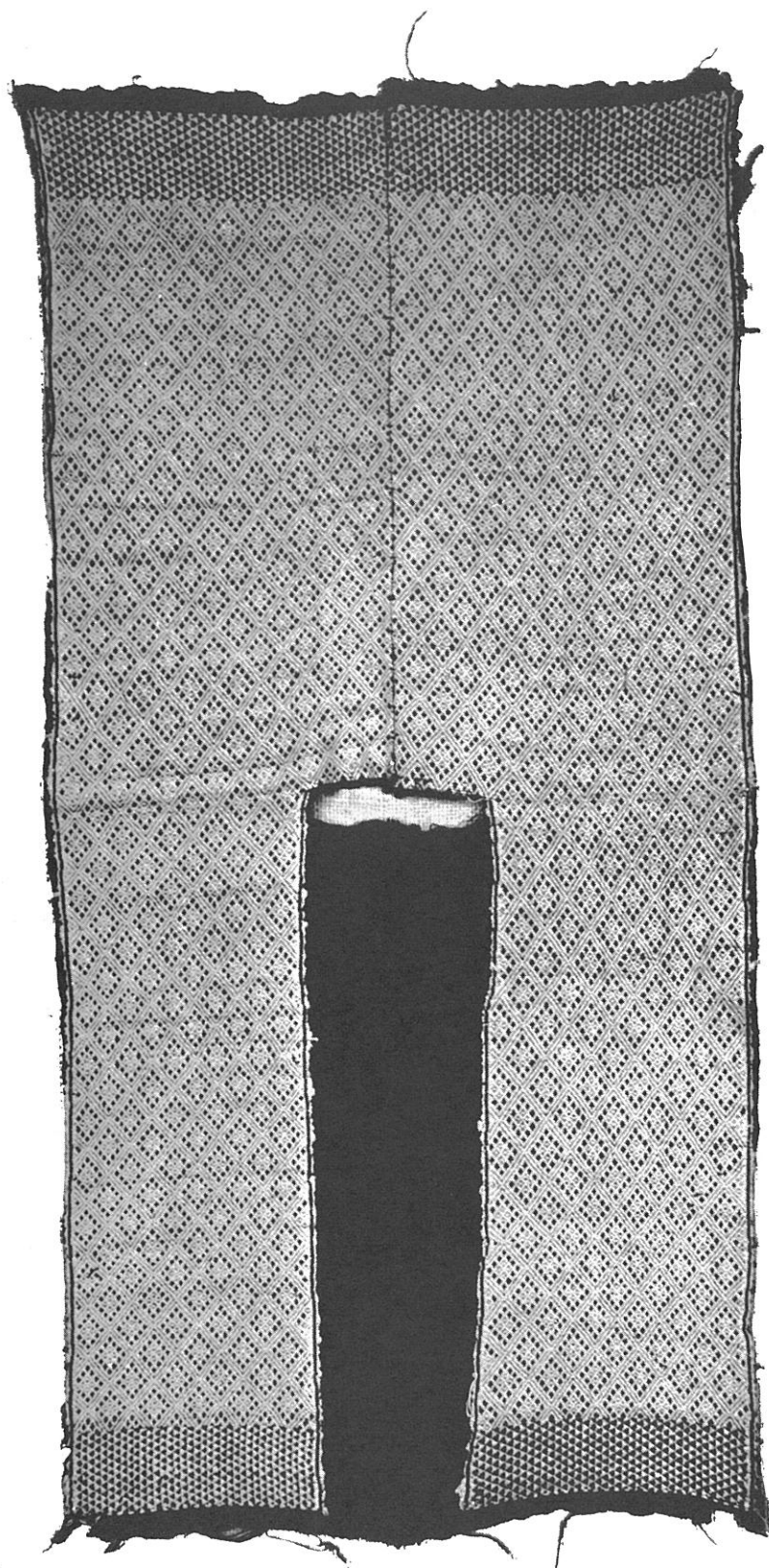
刺しこぎん	1
東こぎん	1
西こぎん	30
三縞こぎん	36
菱 刺	38
津軽のこぎん	森山泰太郎 54
津軽こぎん刺しの模様と構成	工藤 得子 56
南部の菱刺	盛田 稔 58
菱 模 様 讃	松岡 加恵 60



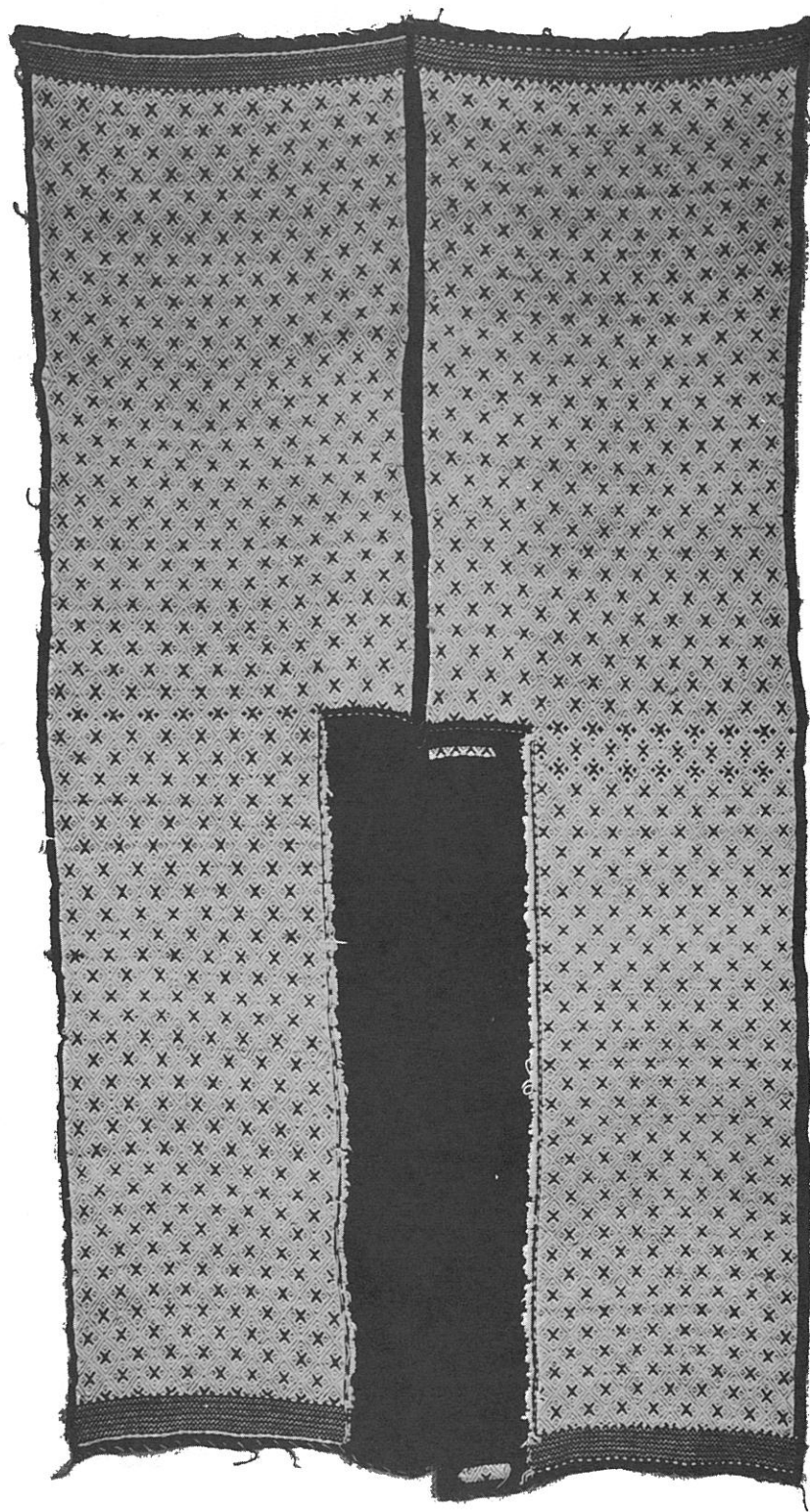




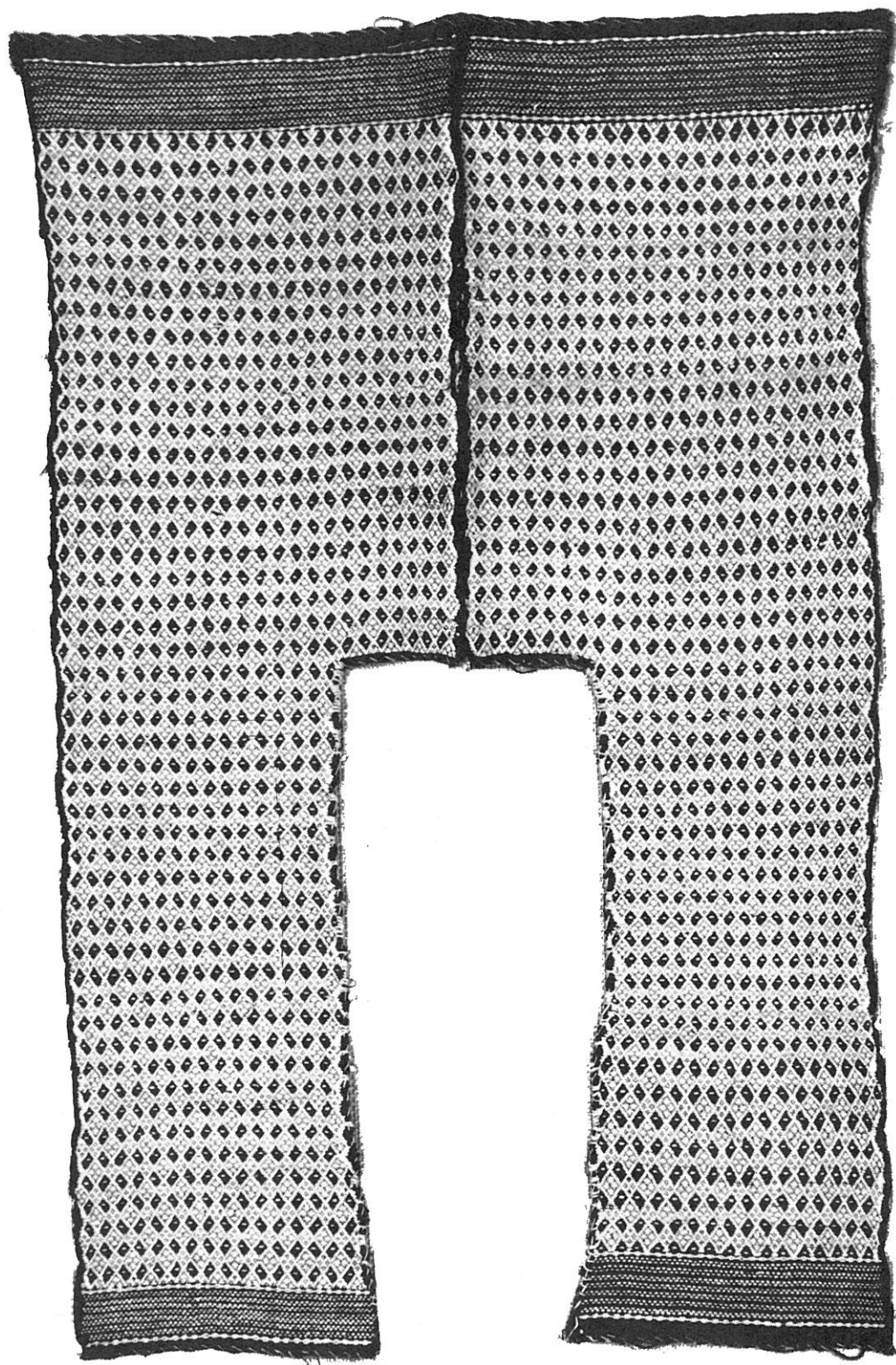
東こぎん (82×47cm)
4つ豆こ《重ね豆こ》



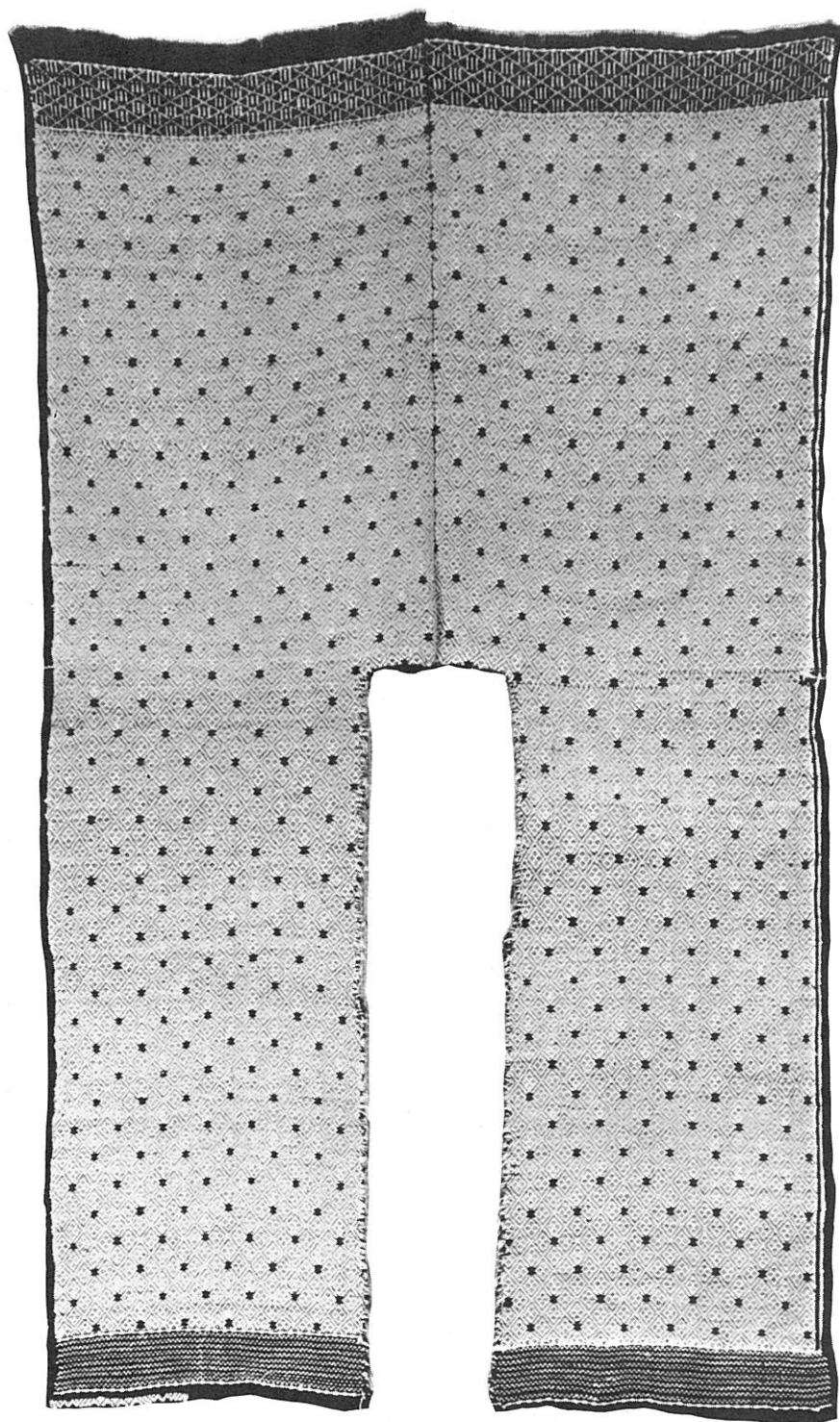
東こぎん (89.5×43.4cm)
きまりとまらず



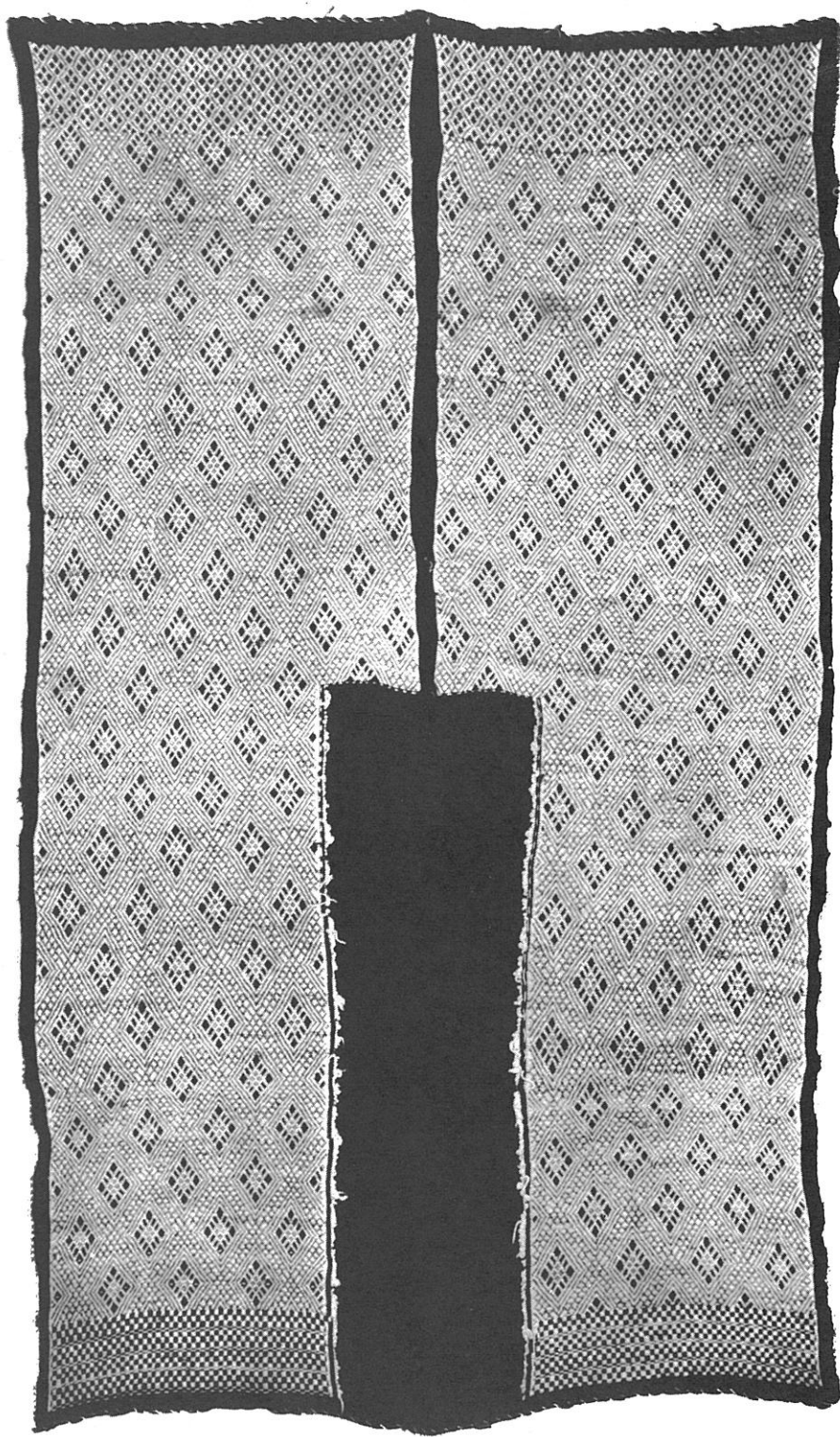
東こぎん (102×56cm)
カチャラズの×刺



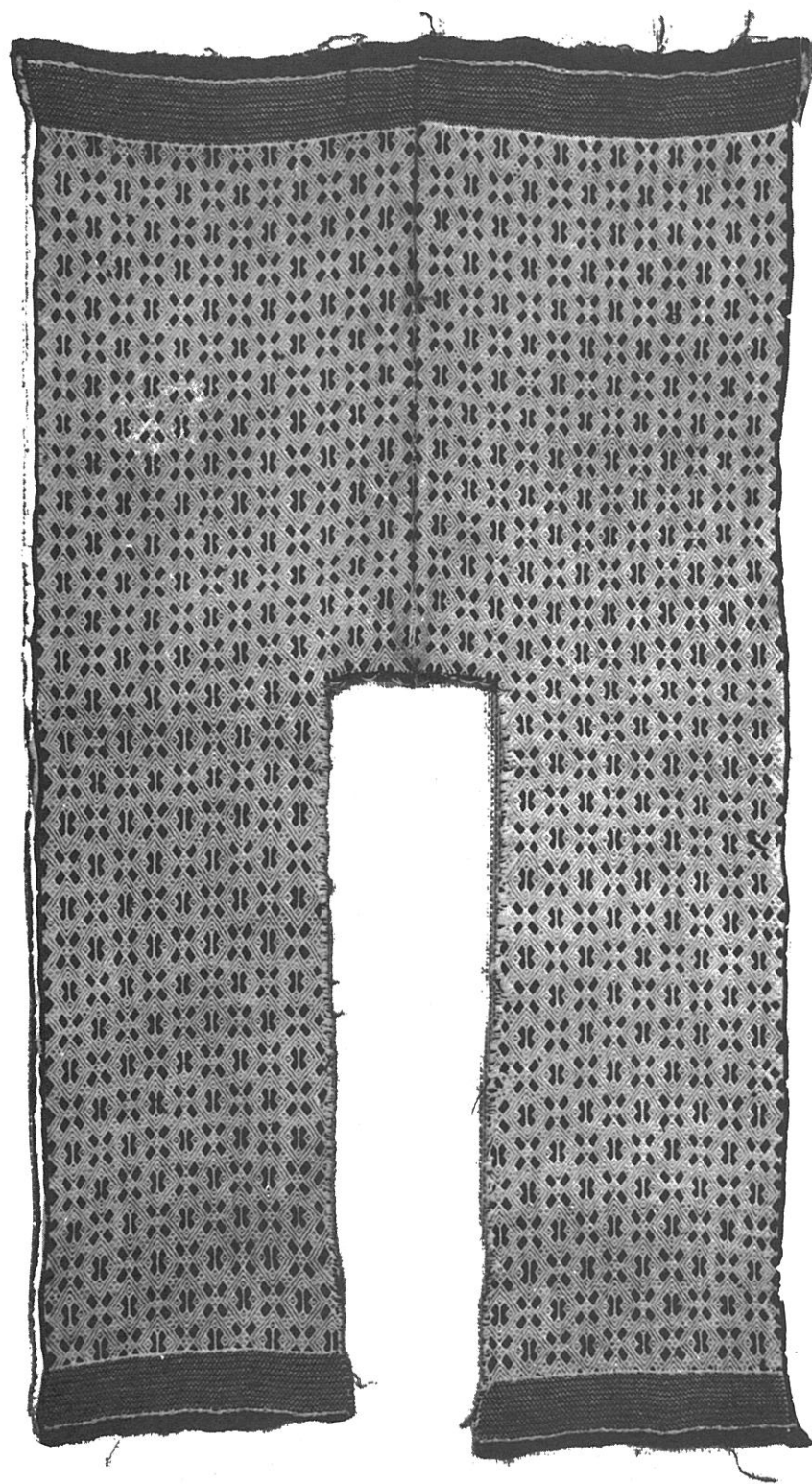
東こぎん (84×55cm)
カチャラズの花つなぎ一糸入



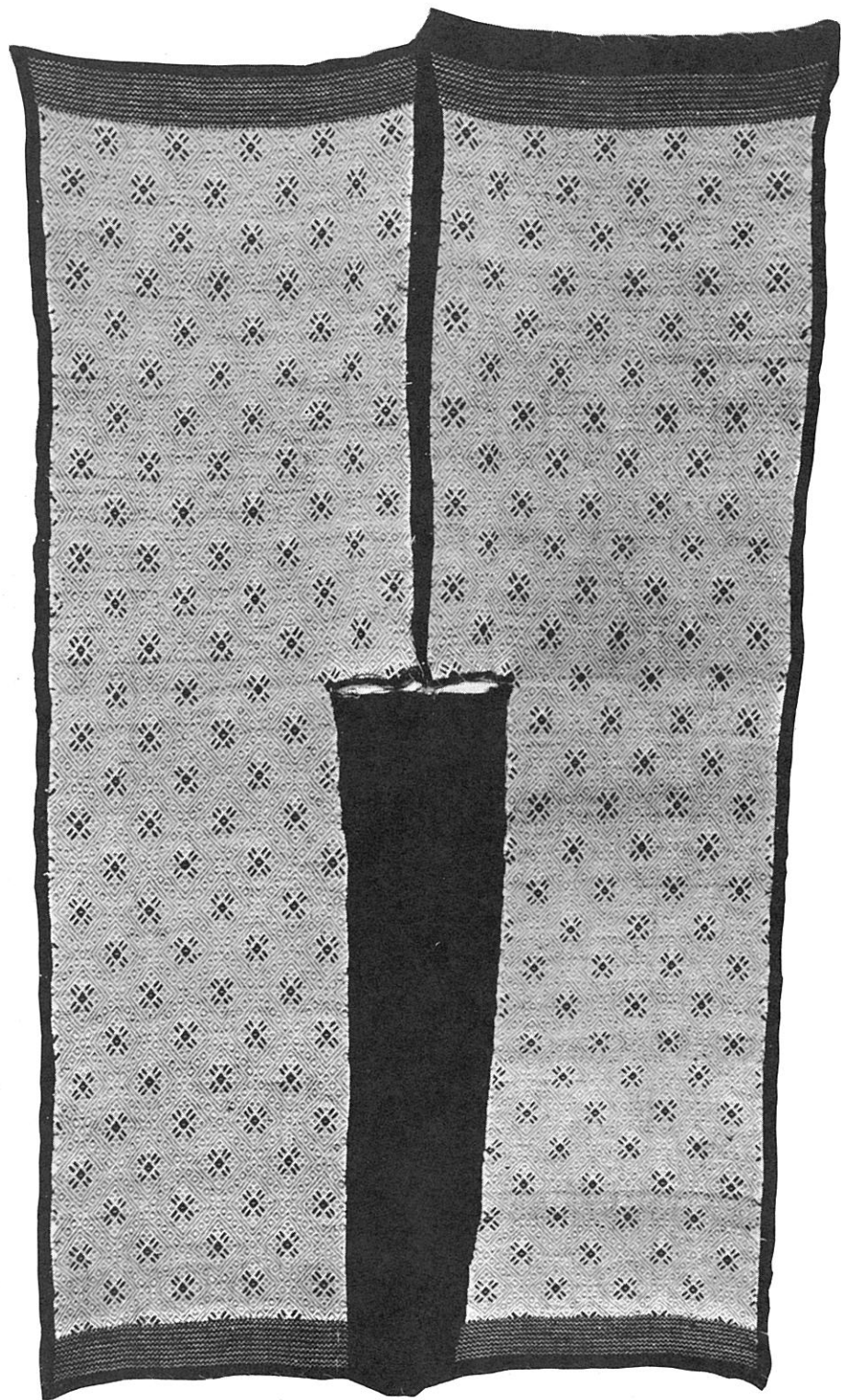
東こぎん (83.4×49cm)
虫喰いこ



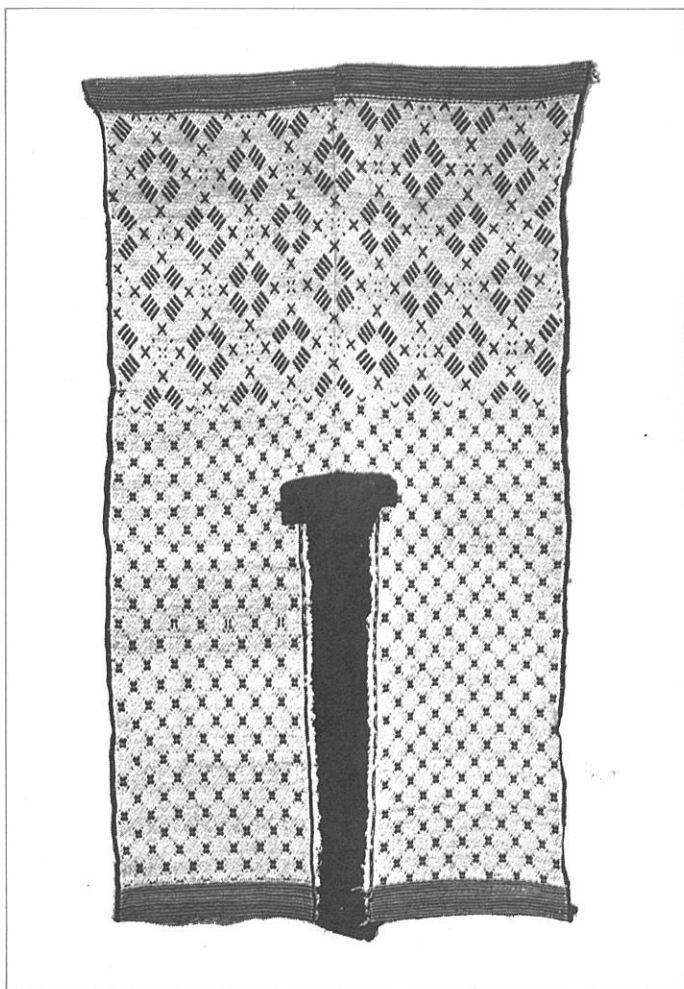
東こぎん (97×56.7cm)
豆この矢羽刺、五筋カチャラス



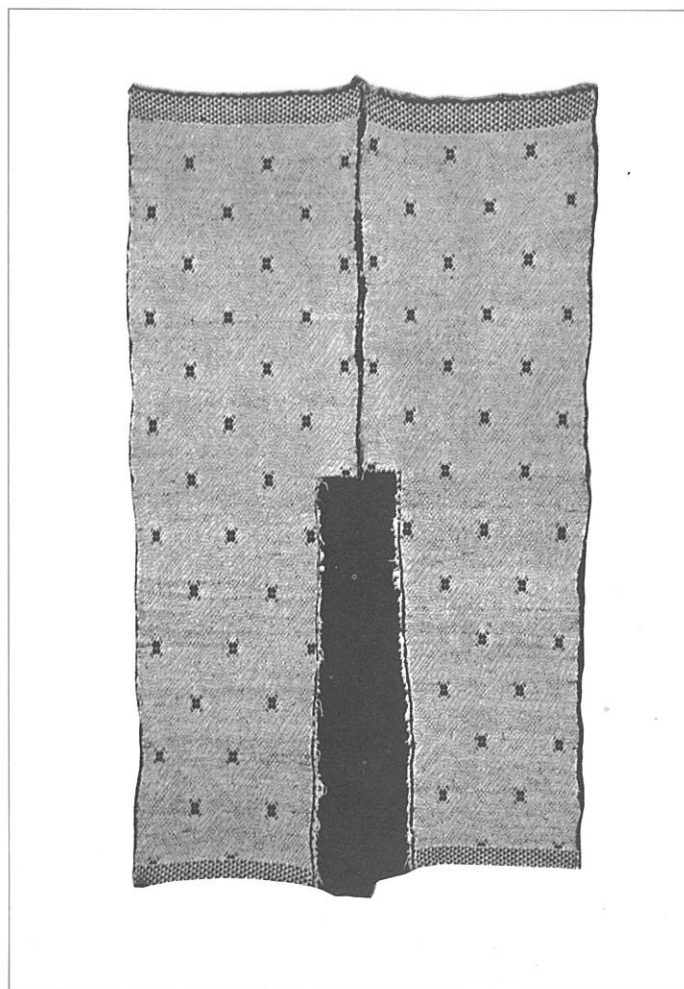
東こぎん (89×50.2cm)
くるびからの花つなぎ



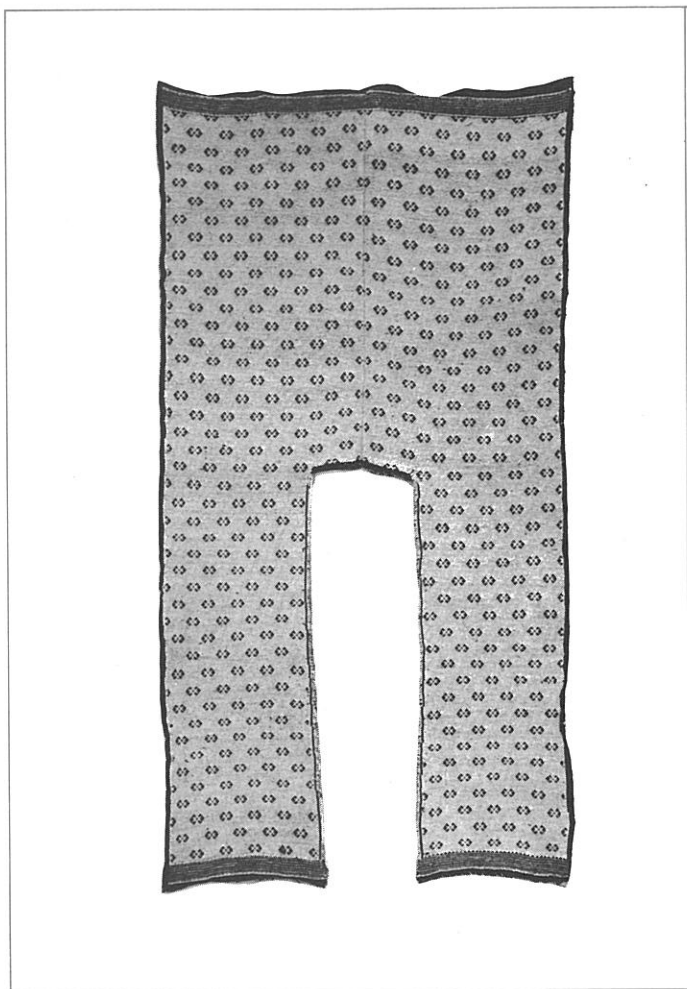
東こぎん (98.3×60cm)
花この矢羽刺、5筋の囲みカチャラス



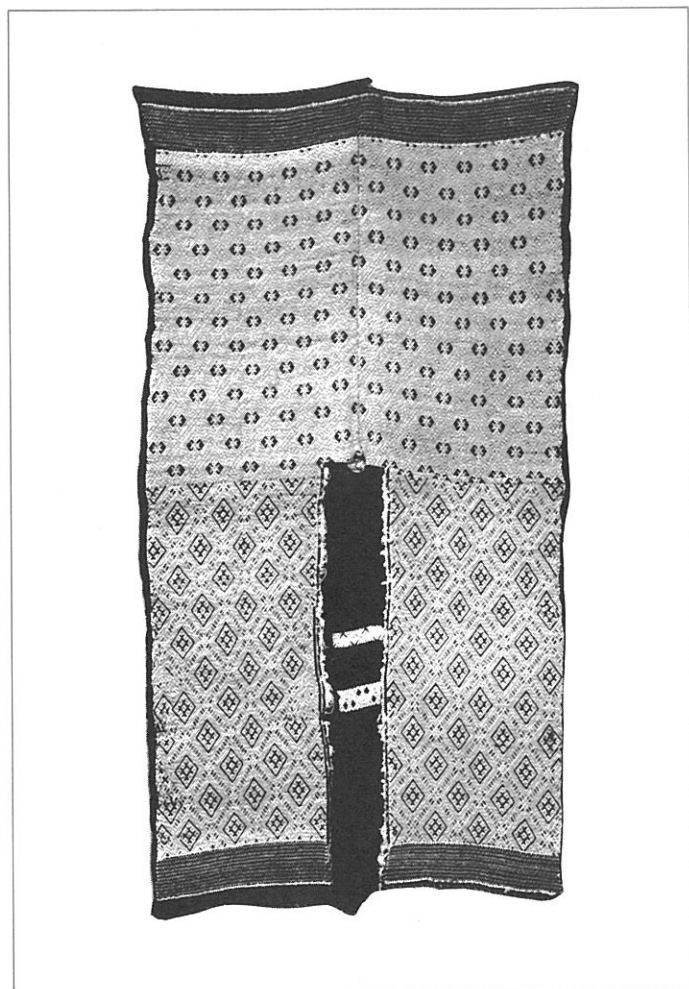
東こぎん (93×56cm)
後：ヤスコの矢羽刺、前：べこ刺



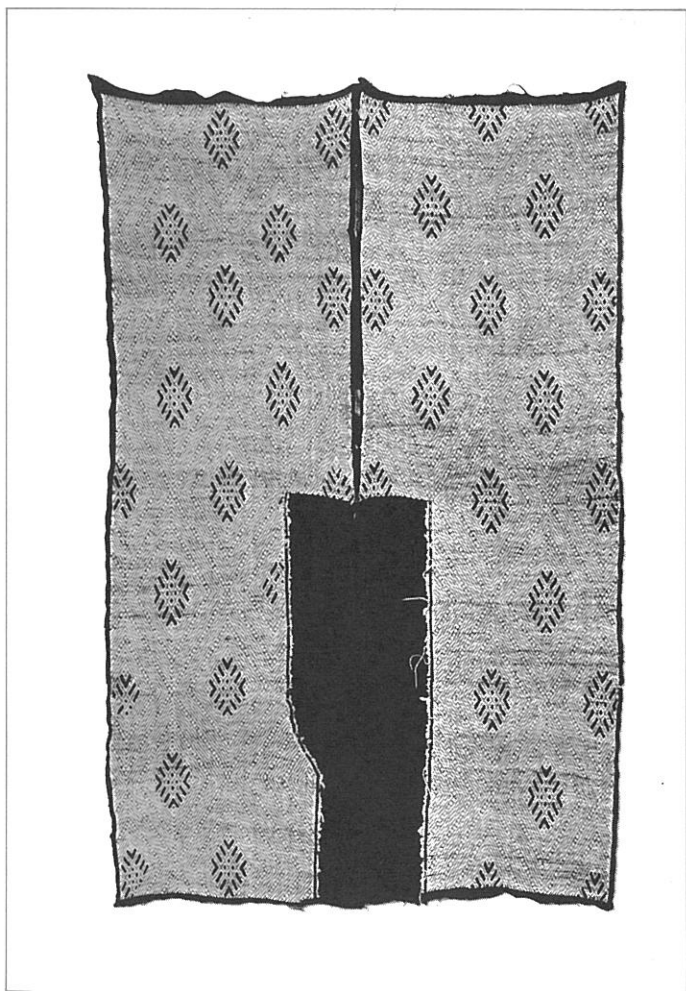
東こぎん (95×55.7cm)
べこ刺、糸三本、5筋カチャラズ



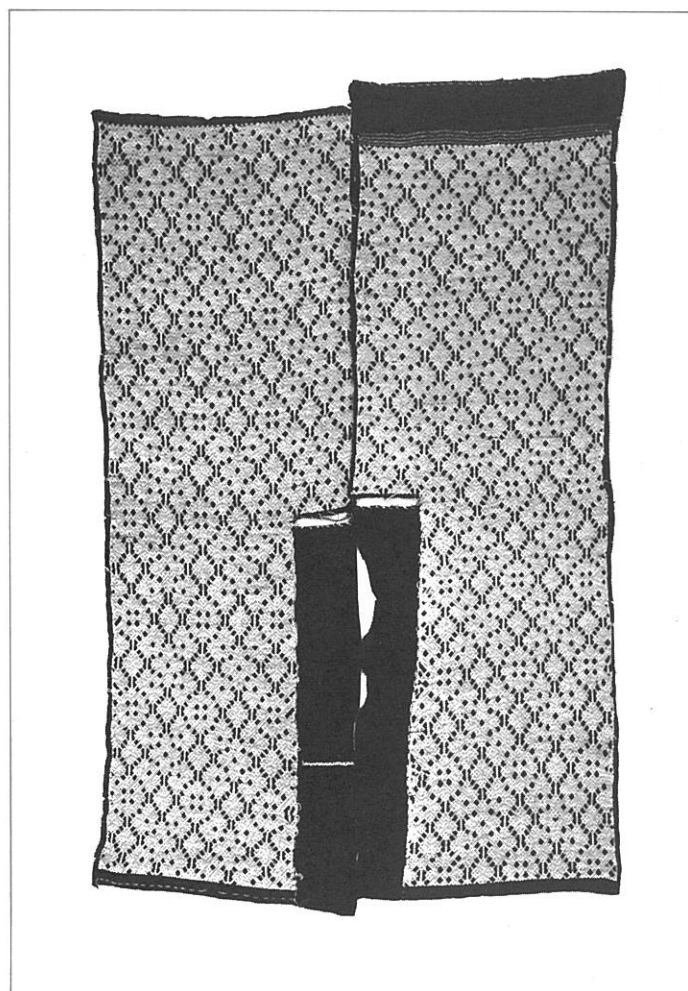
東こぎん (96.5×50cm)
テコナ、糸1本、囲みカチャラズ



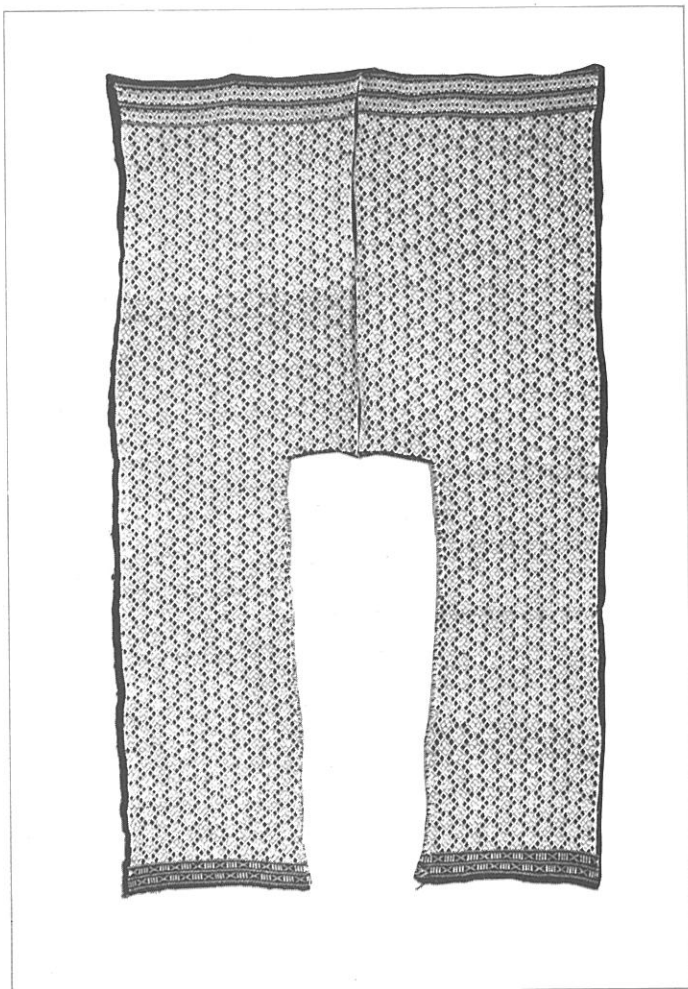
東こぎん (89×47.3cm)
後：テコナ、カチャラズ 前：あわ花この井型
浮き、糸、ねずみの園こ



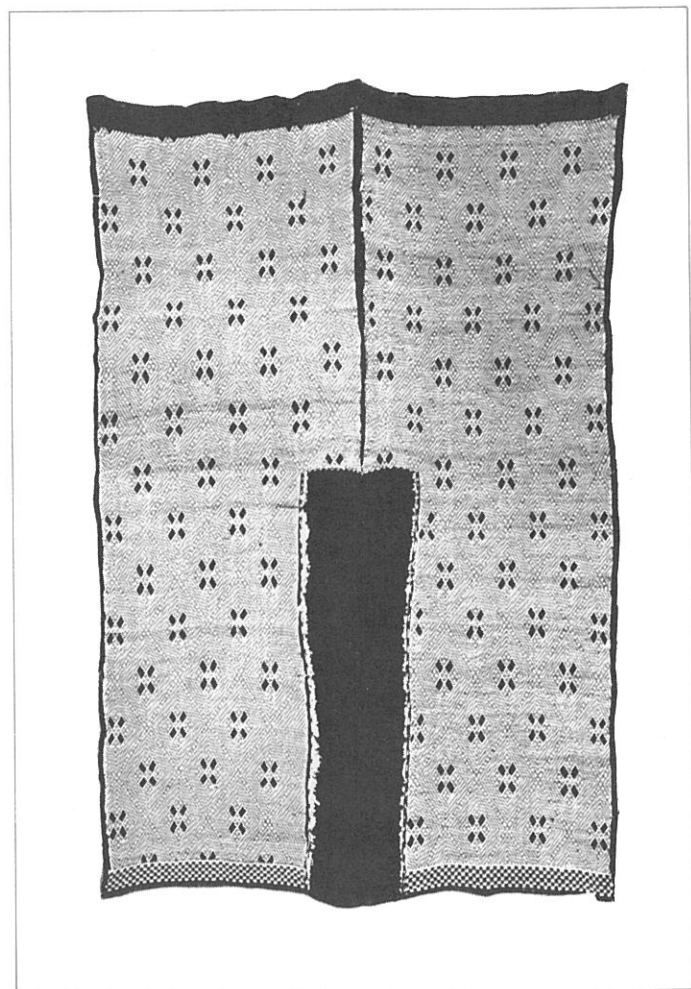
東こぎん (92×59cm)
花この矢羽刺、糸、カチャラズ



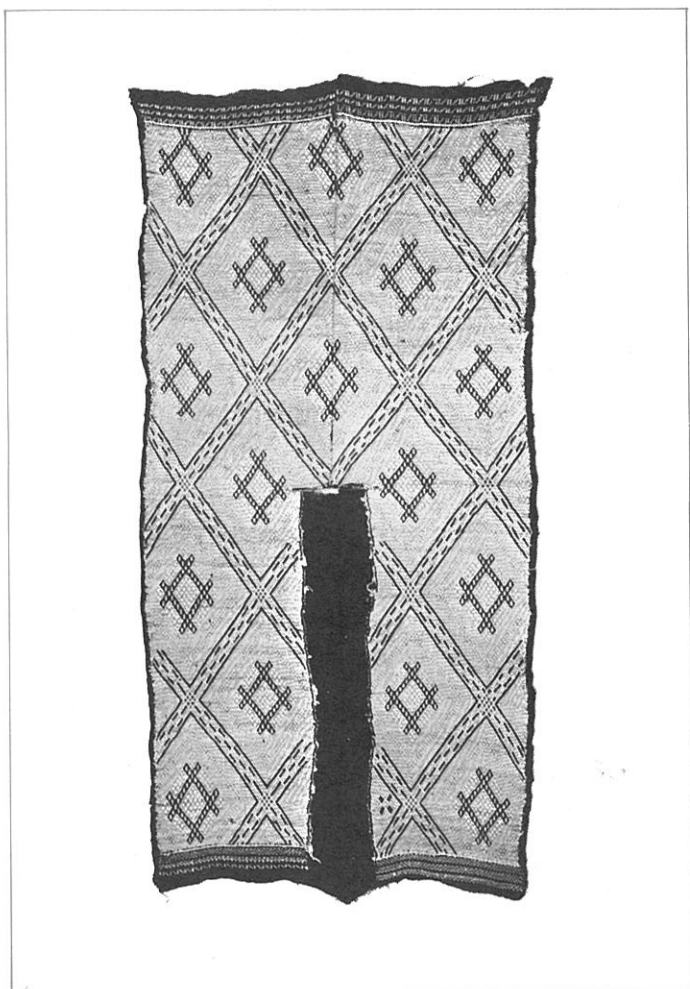
東こぎん (88.2×59.4cm)
くつわつなぎの糸入4つ合せ



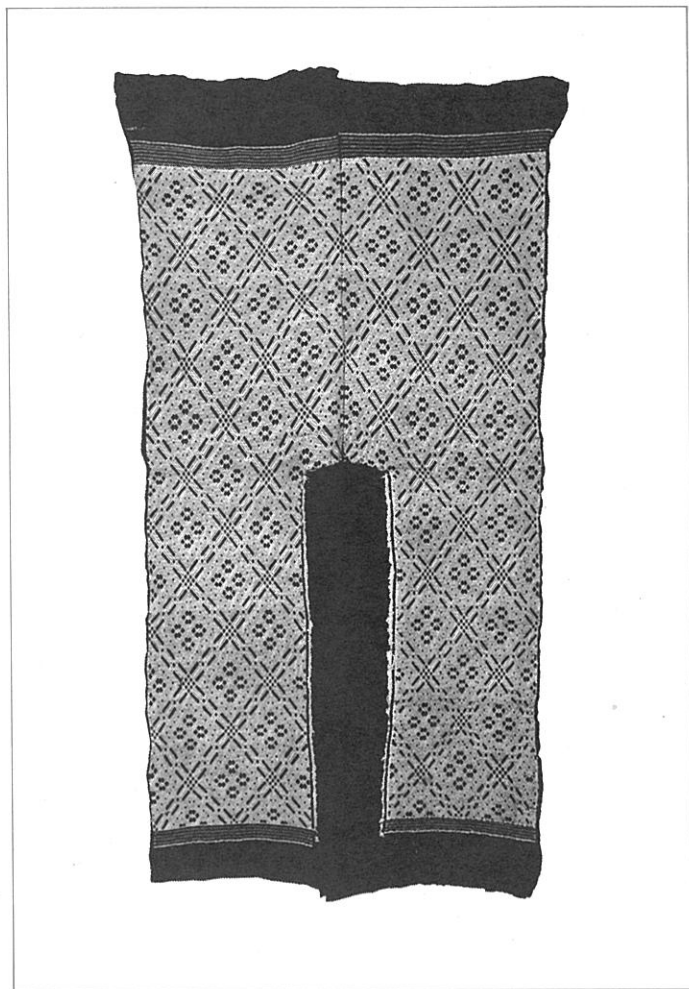
東こぎん (91×56cm)
とまらず



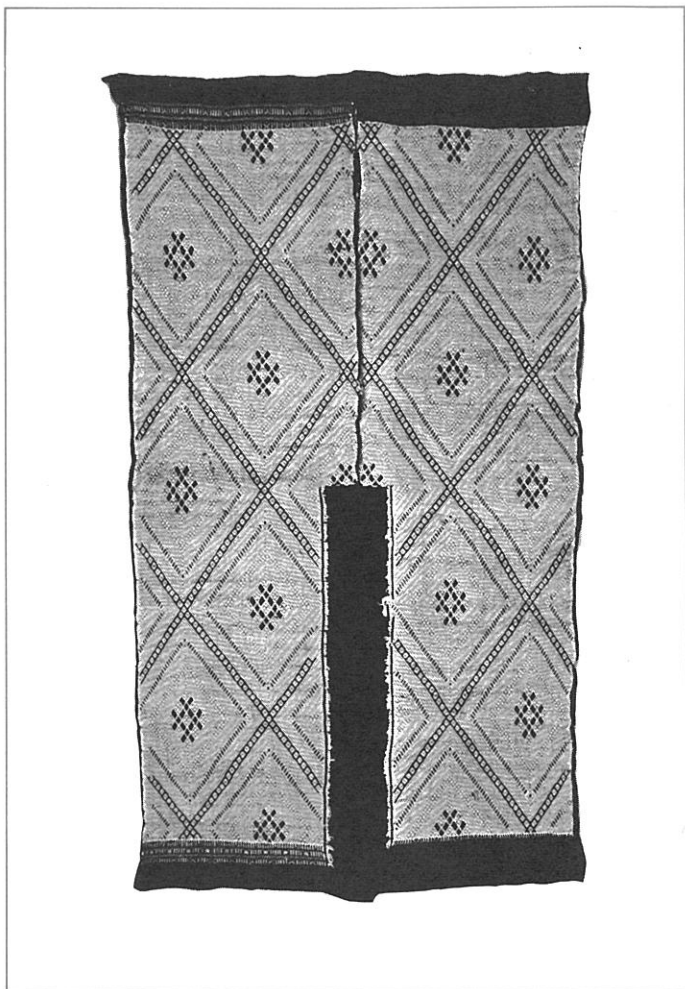
東こぎん (85×58cm)
カチャラズの四つの豆こ、糸、5筋カチャラズ



東こぎん (100×51cm)
糸入り井戸枠、糸、カチャラズ、浮きぐろ



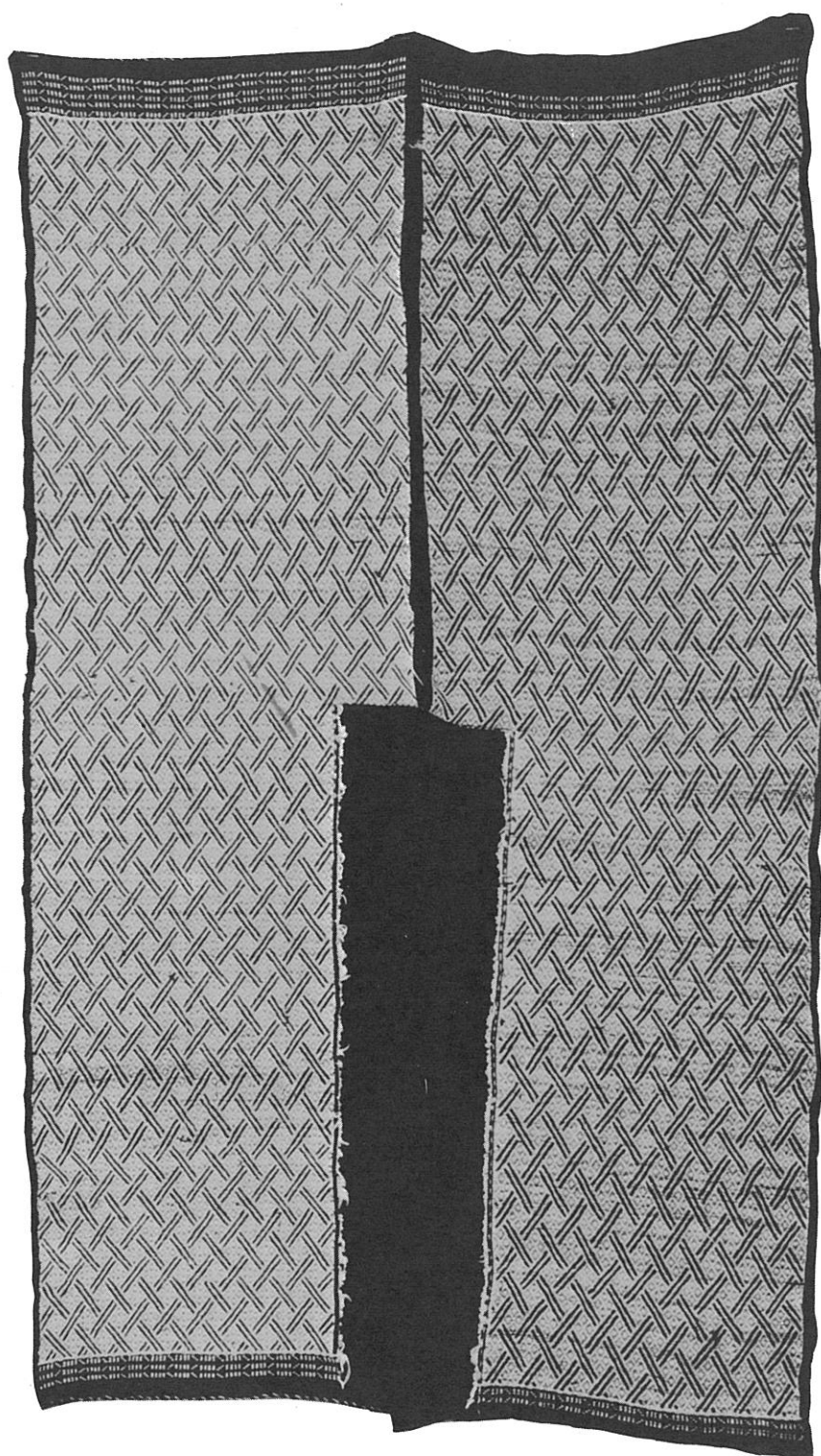
東こぎん (103×57cm)
豆こ入りの島田刺、4つ合せ



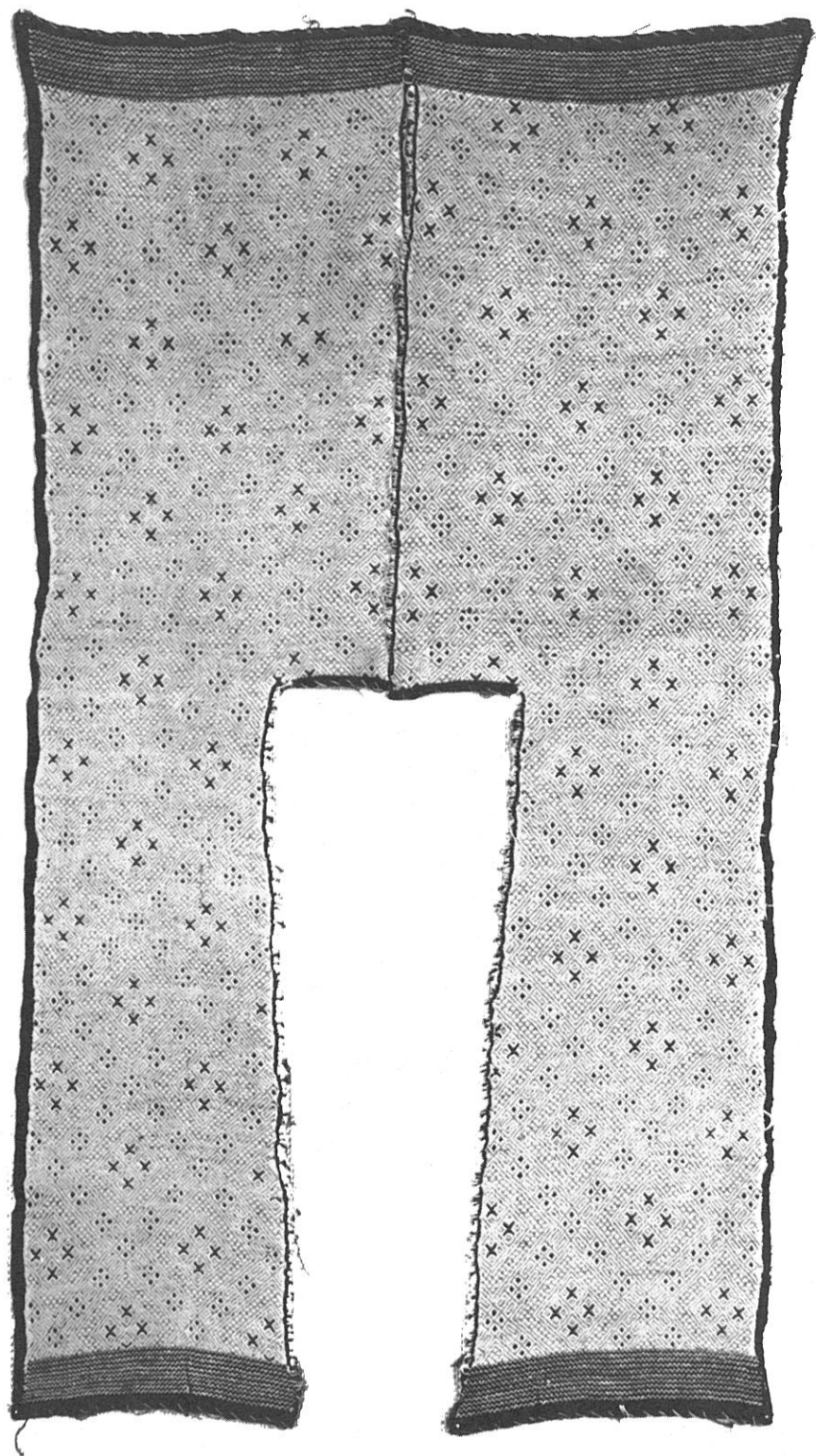
東こぎん (100×58cm)
カチャラズの井型、糸、ねずみの園こ、あわこ



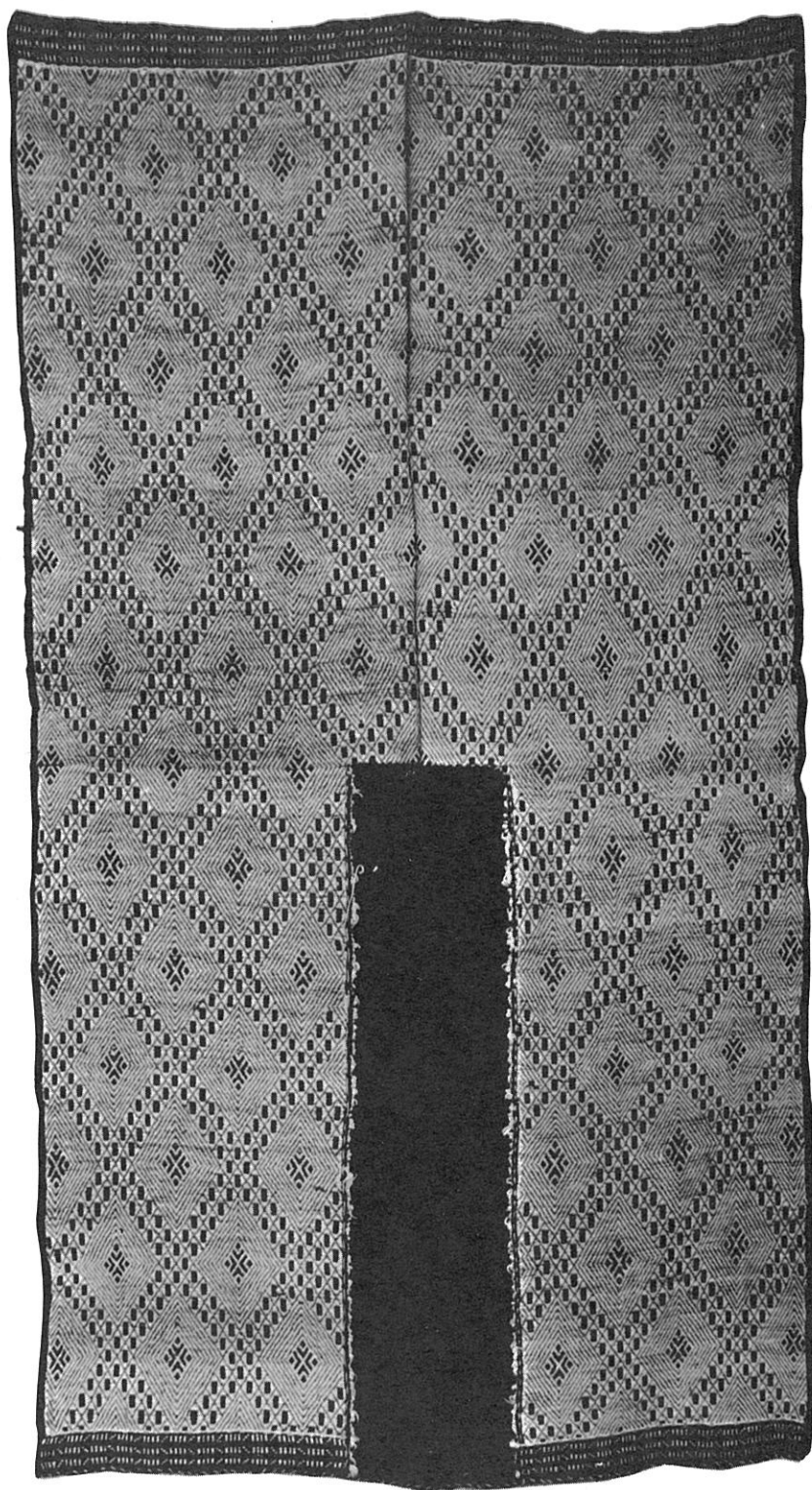
東こぎん (86.4×56cm)
後前：糸柱入のカチャラズの井戸枠、糸、浮きぐろ、
肩：花つなぎ



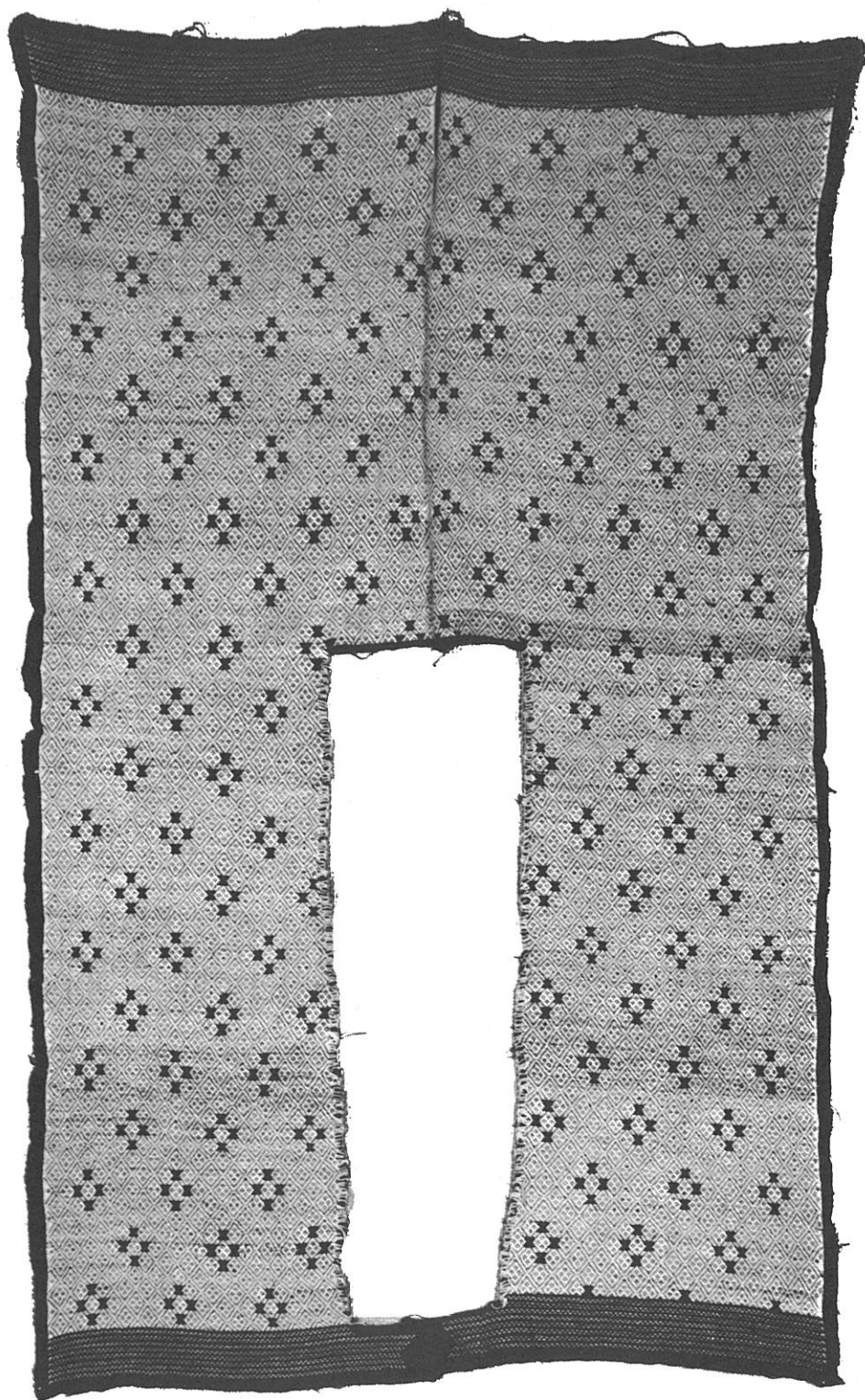
東こぎん (103×59cm)
囲みカチャズの紗綾型



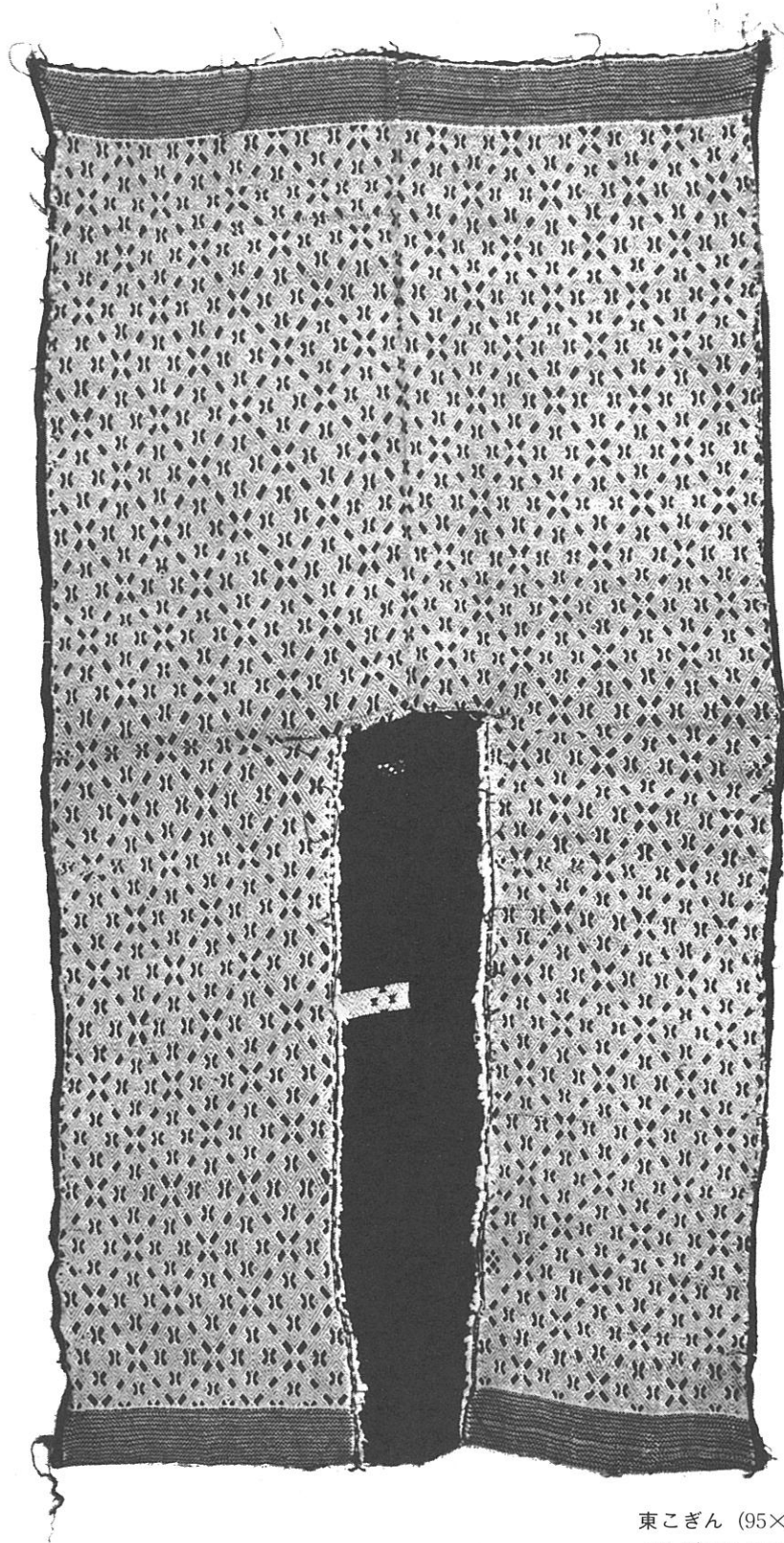
東こぎん (53×92cm)



東こぎん (107×58cm)
豆この×刺、糸、石だたみ

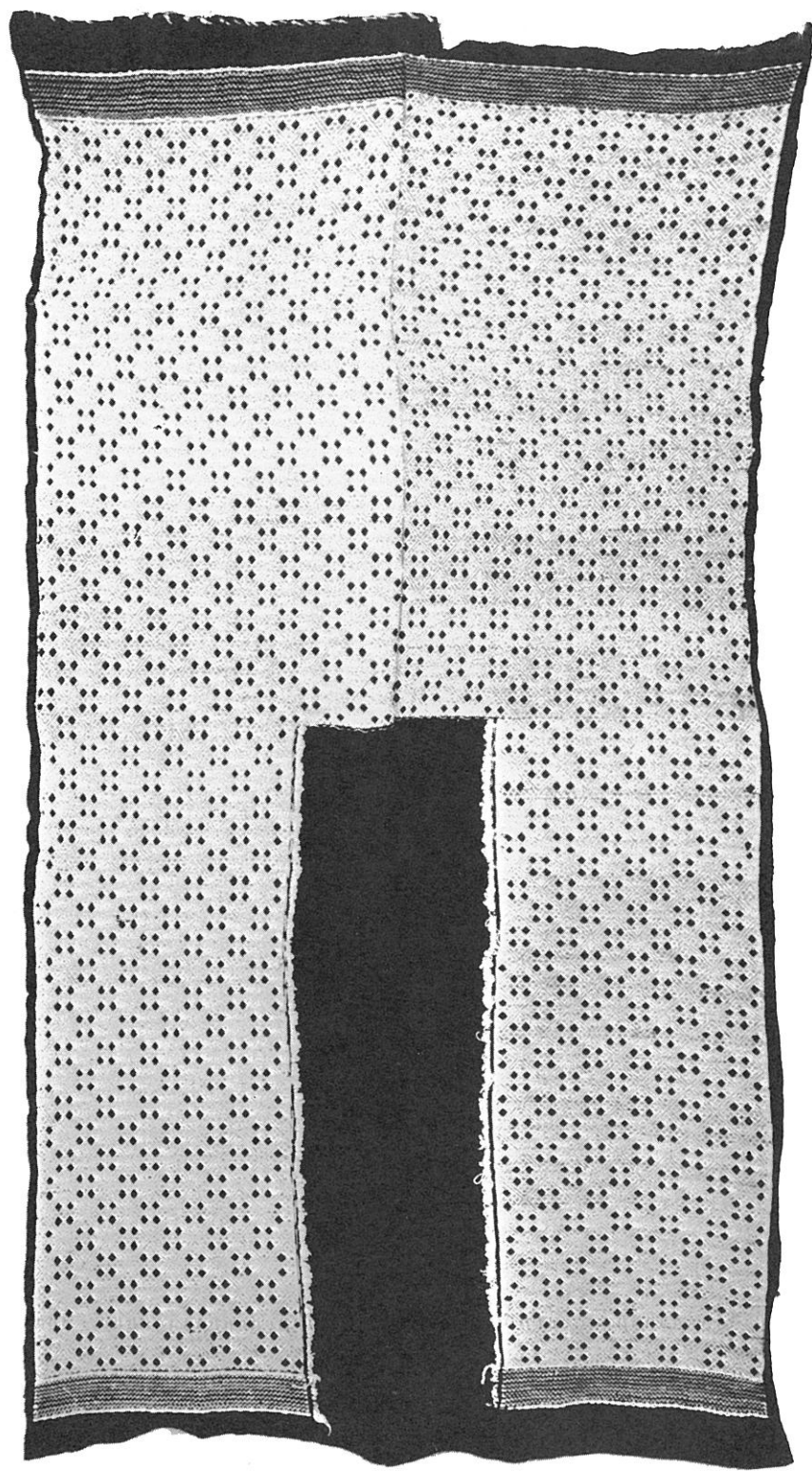


東こぎん (95×58cm)
くも刺《虫喰いこ》

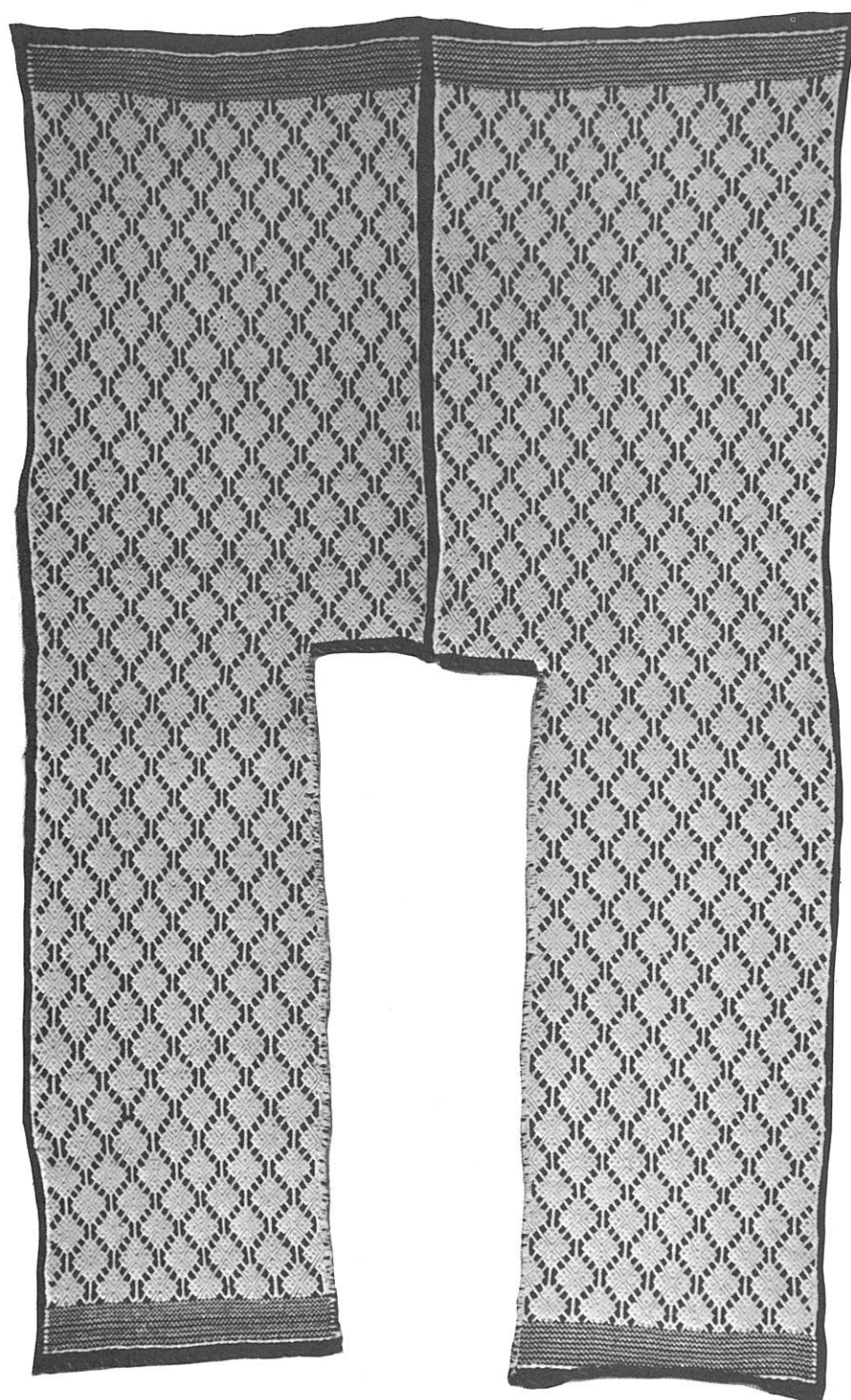


東こぎん (95×48cm)

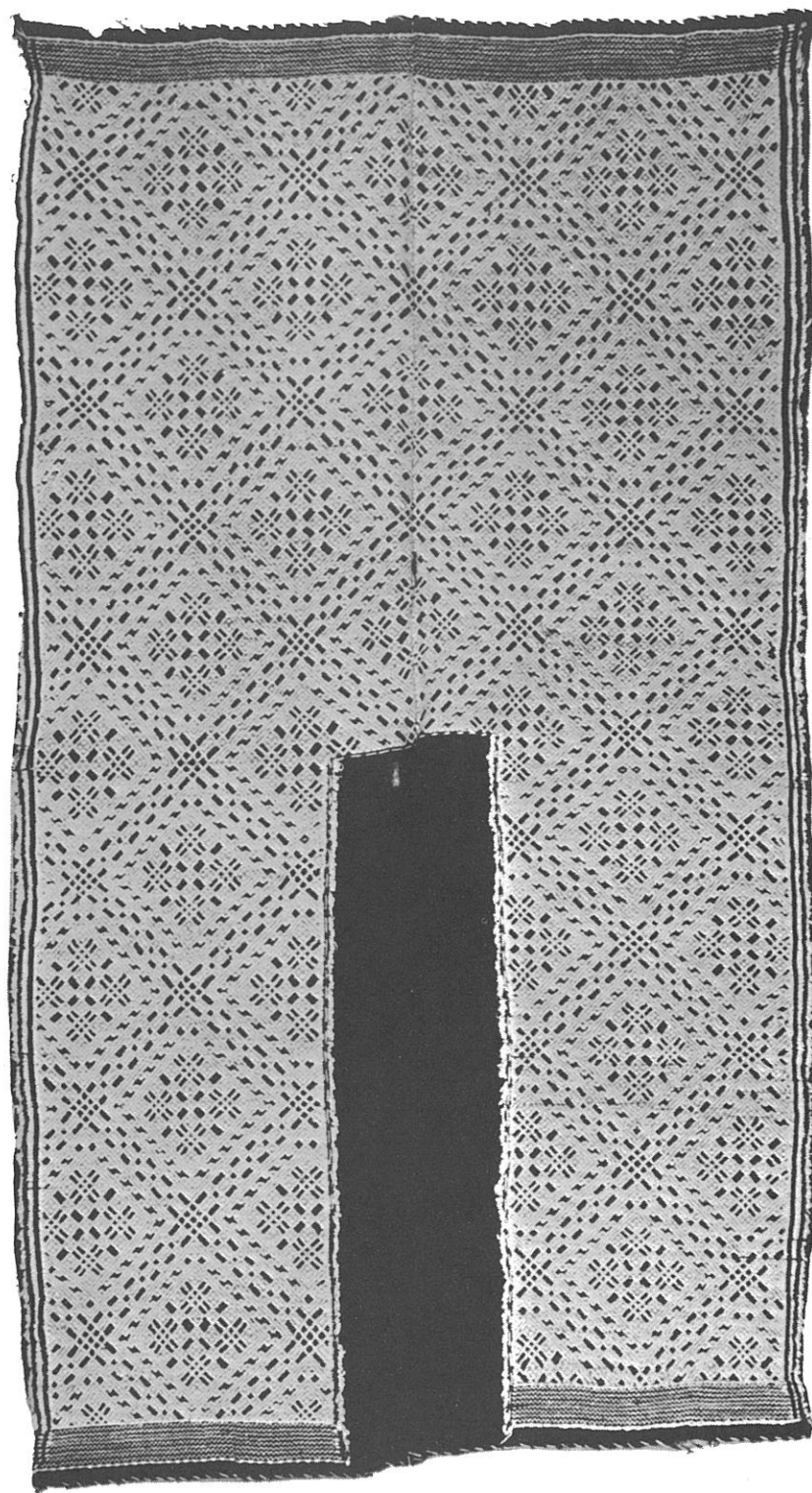
くるびから糸入4つ合せ、結び花の流れ



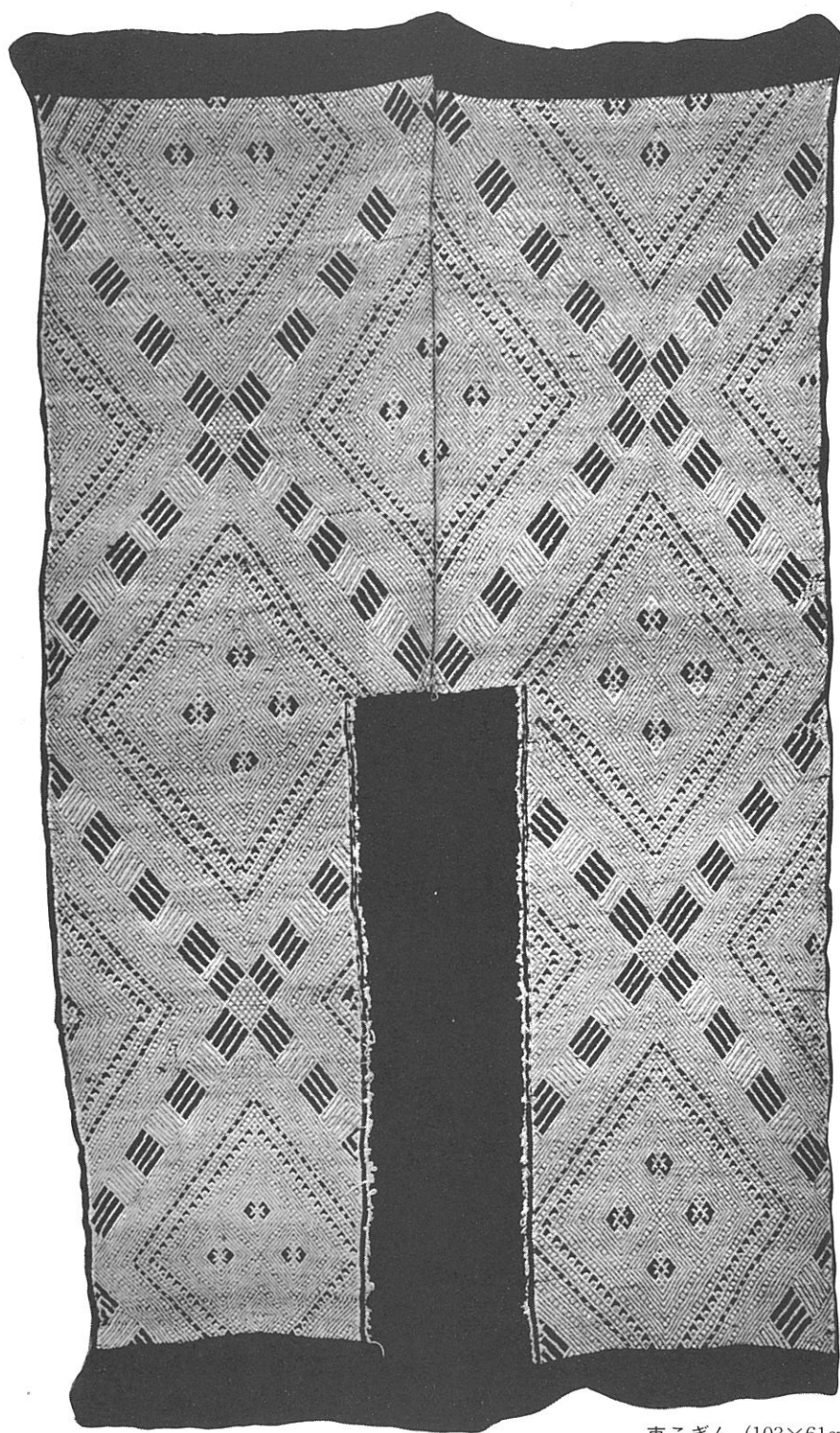
東こぎん (96.5×52.4cm)
4つ豆こ、糸



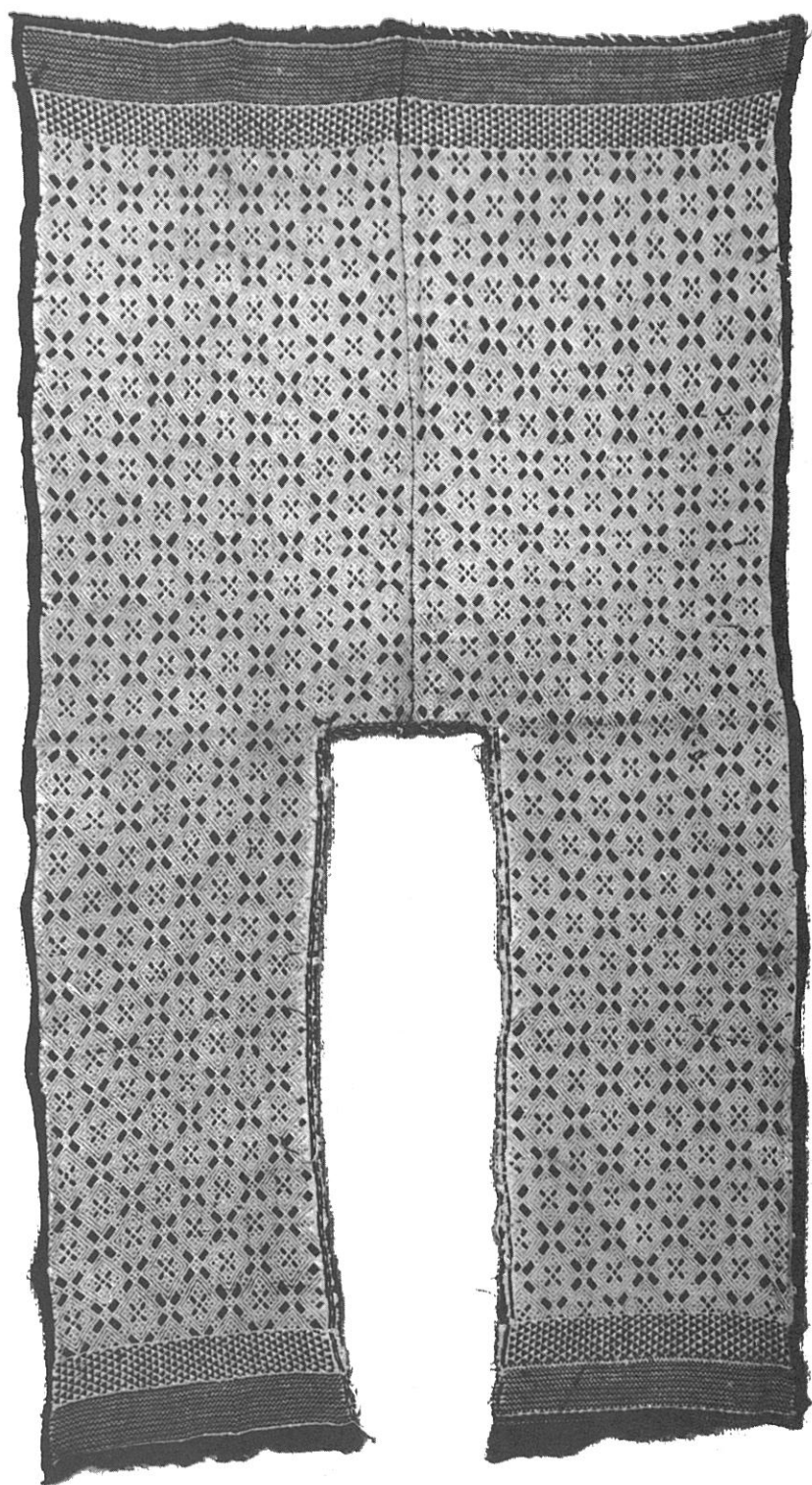
東こぎん (95×59cm)
くつわつなぎ



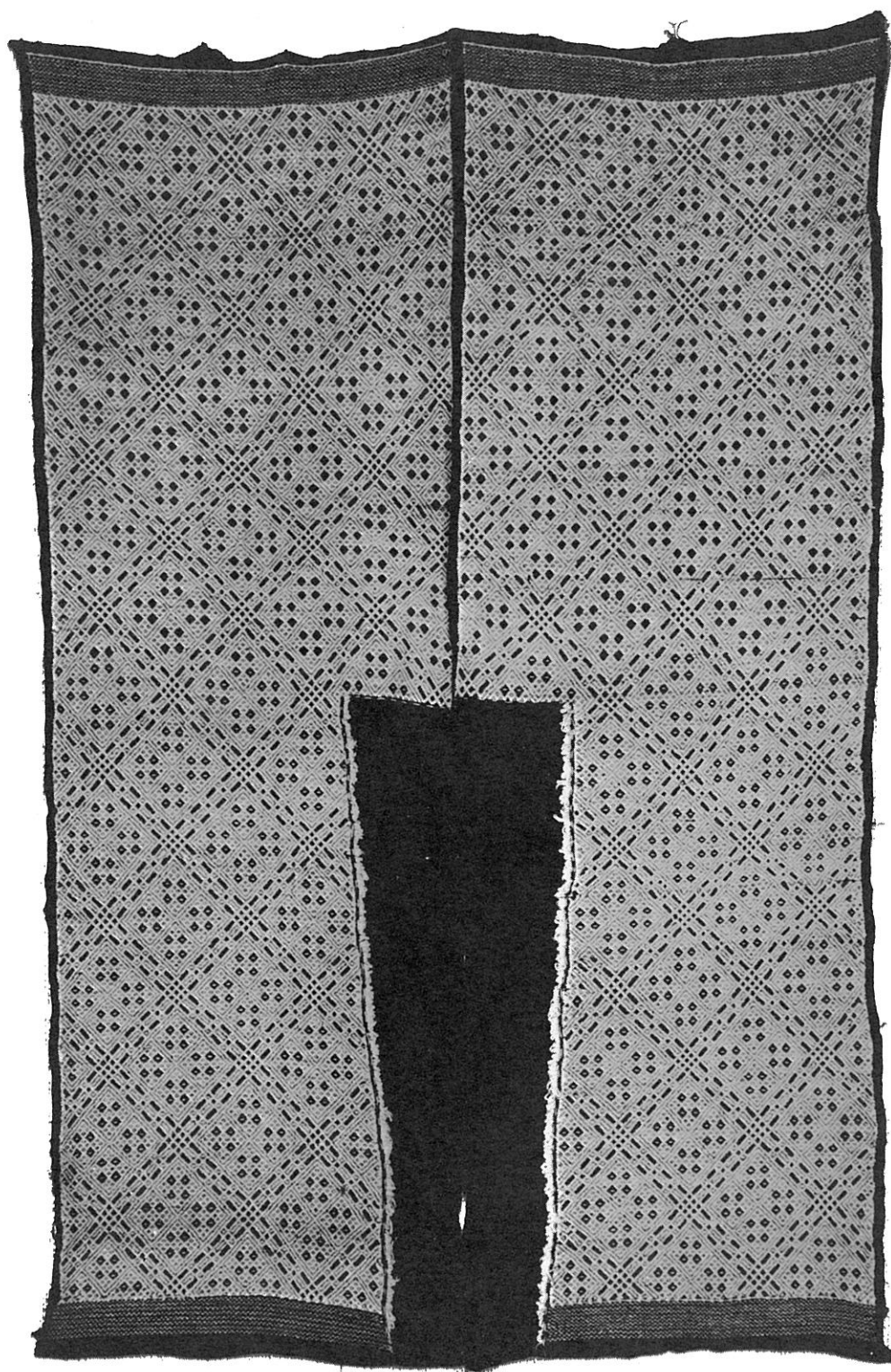
東こぎん (91.5×50cm)
矢羽刺の花つなぎ、糸、くっつき花こ



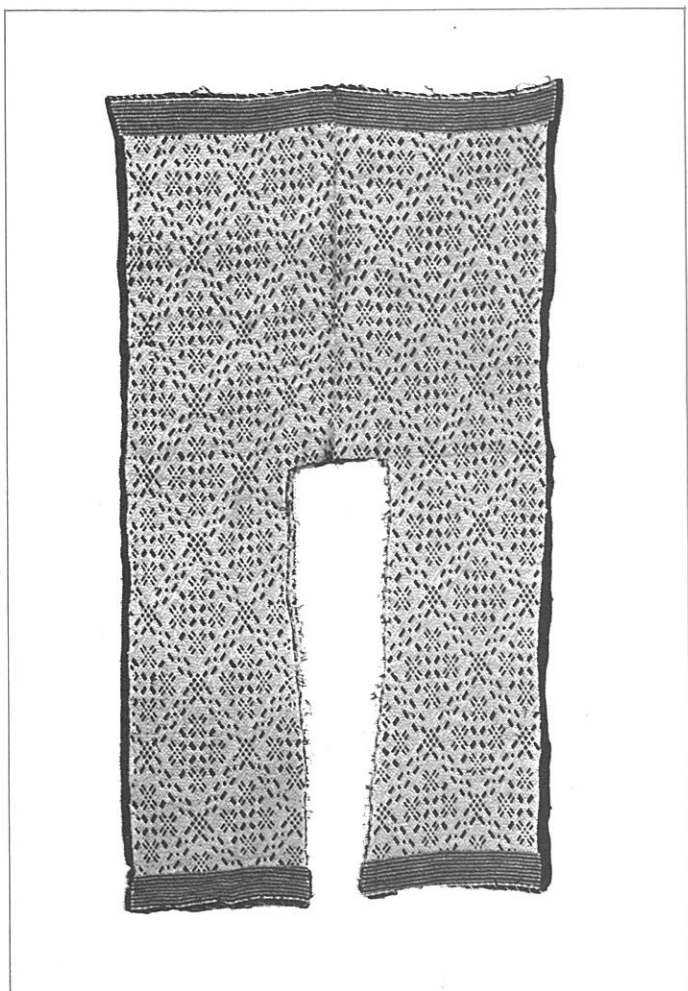
東こぎん (103×61cm)
 テコナに糸、カチャラズを入れた4つ合せ、
 カチャラズ、花こ、とび糸こ



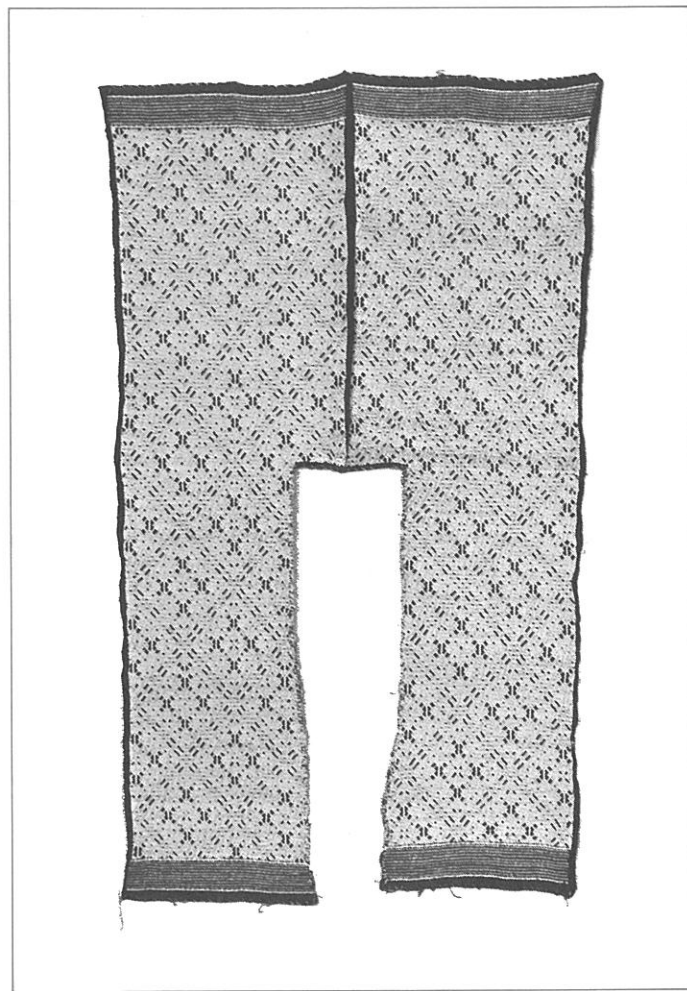
東こぎん (99×54cm)
ヤスコの花つなぎ



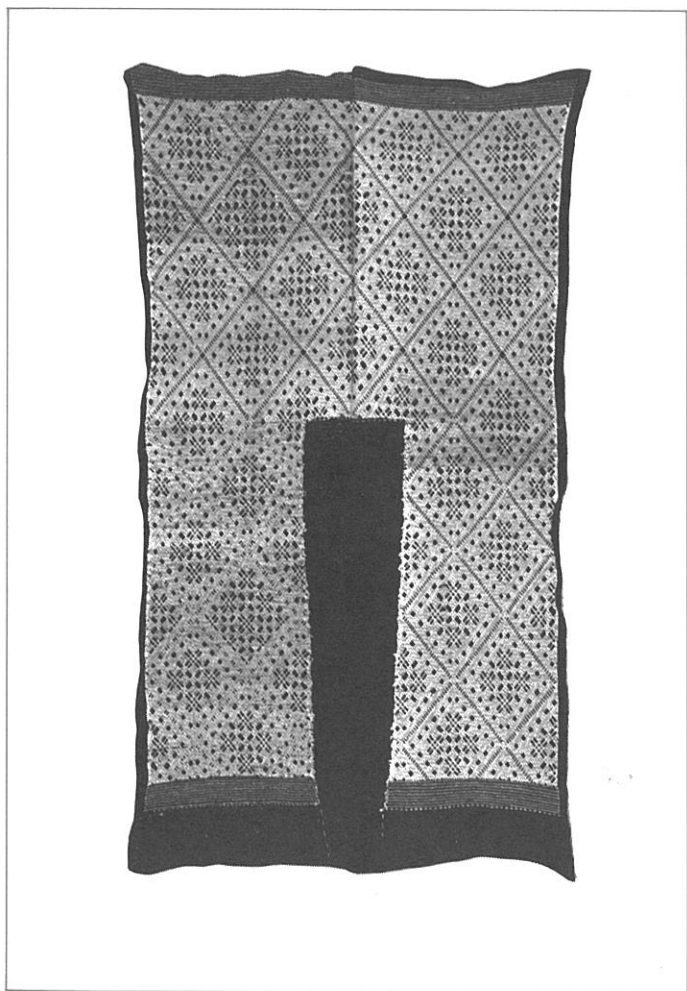
東こぎん (93×60cm)
4つ豆こ糸入4つ合せ



東こぎん (101×56cm)
矢羽刺の花つなぎ、糸



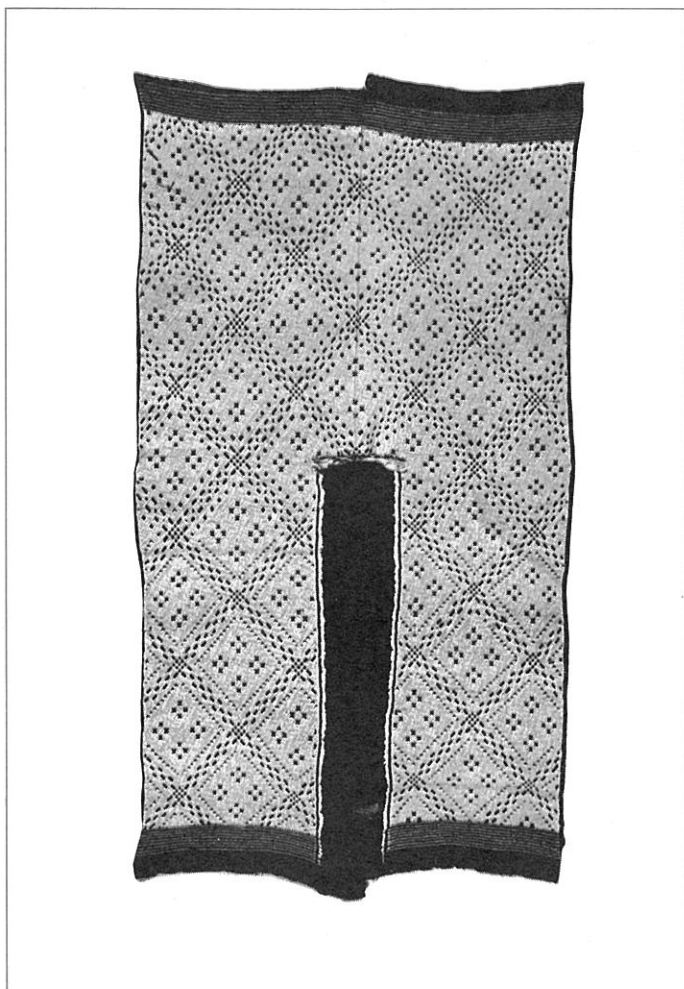
東こぎん (10×61cm)
くつわの豆こ入り4つ合せ、糸



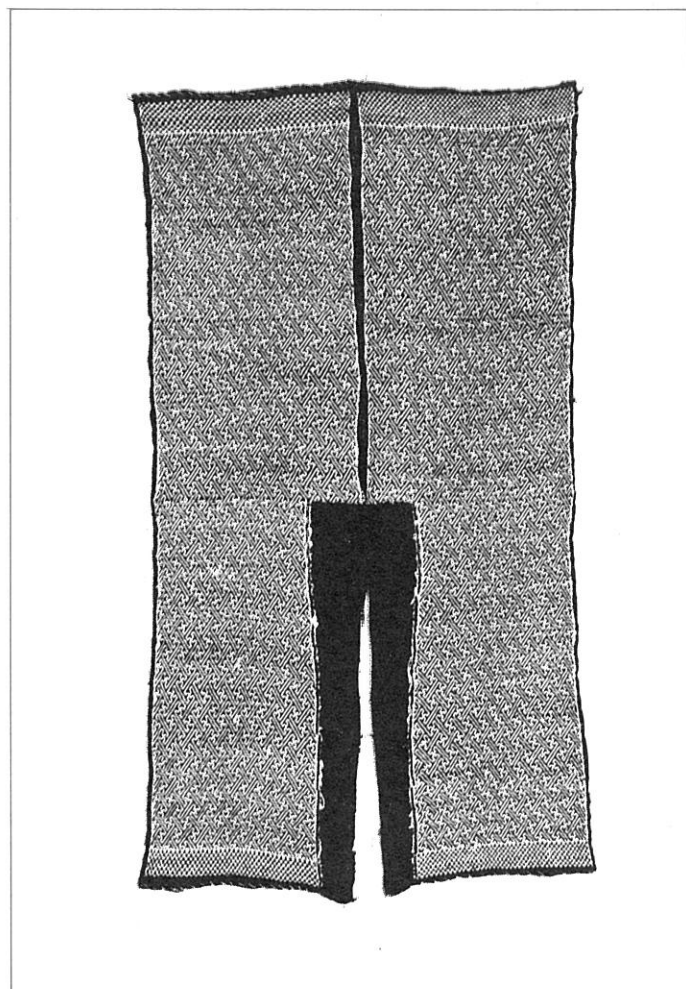
東こぎん (96×54cm)
矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、ねずみの歯こ



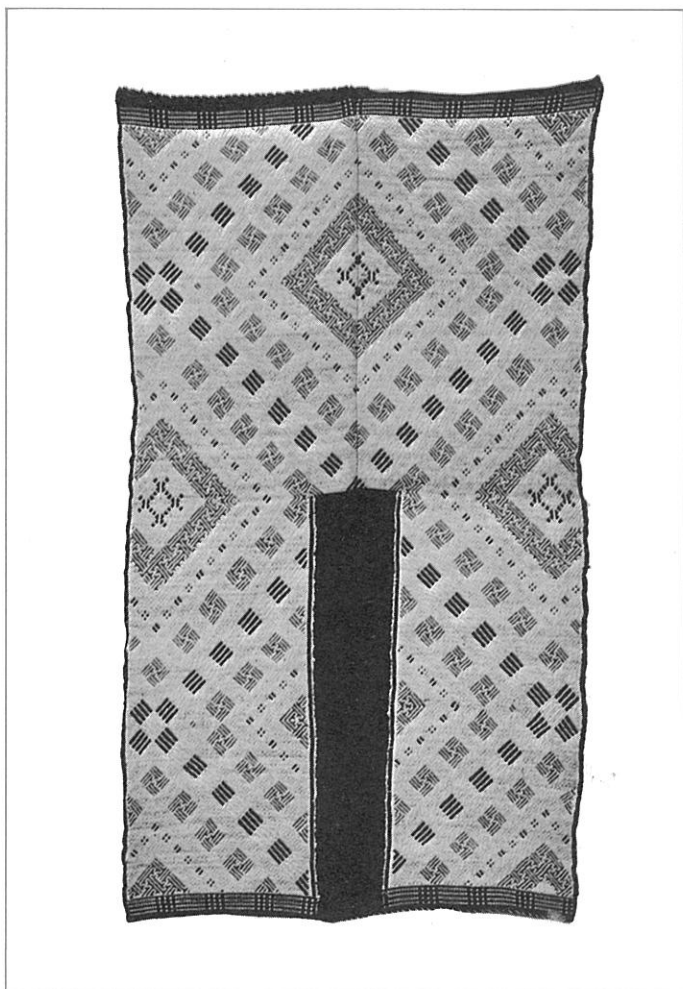
東こぎん着物 (丈126cm、肩幅61cm)
紗綾型



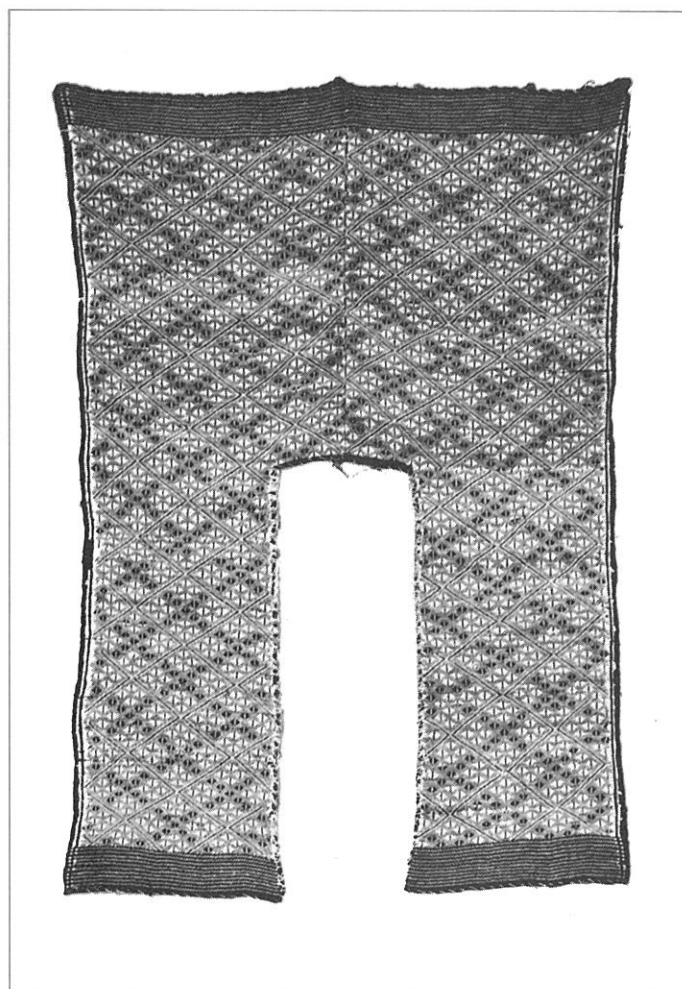
東こぎん (91×52cm)
くも刺4つ合せ、豆こ、糸



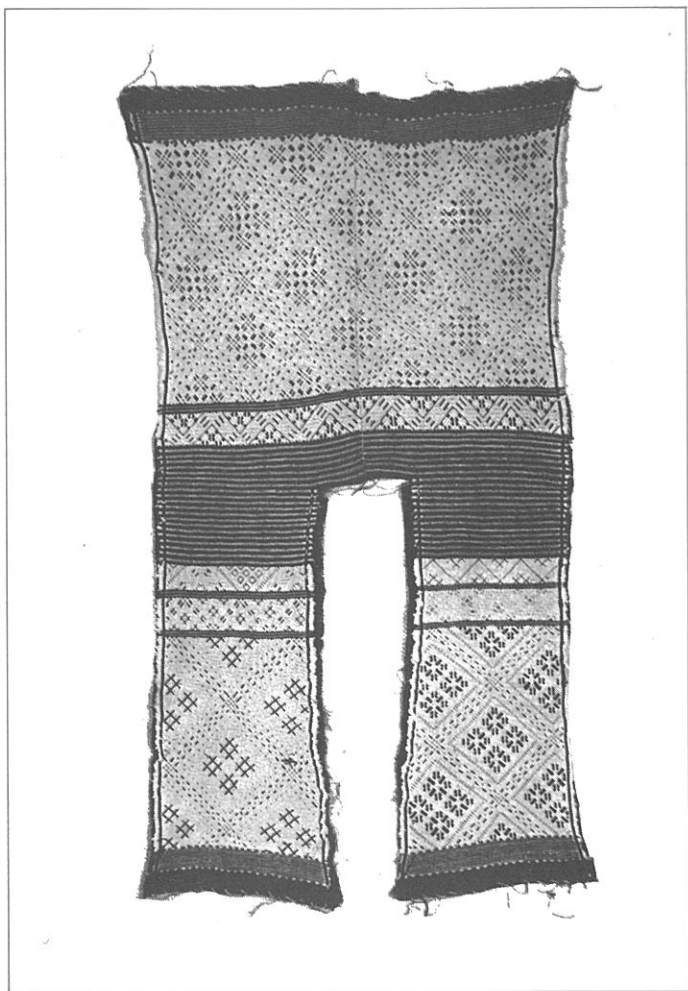
東こぎん (98.5×50.5cm)
紗綾型、下、鱗型



東こぎん (103×59cm)
紗綾型のくつわつなぎ



東こぎん (82×57.7cm)
ソロバン刺



西こぎん (87×48.6cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、花こ、井型の4つ合せ。

井型糸入4つ合せ

右、井、井型、花この矢羽刺、くるびからの×刺、
糸、ねずみの園こ



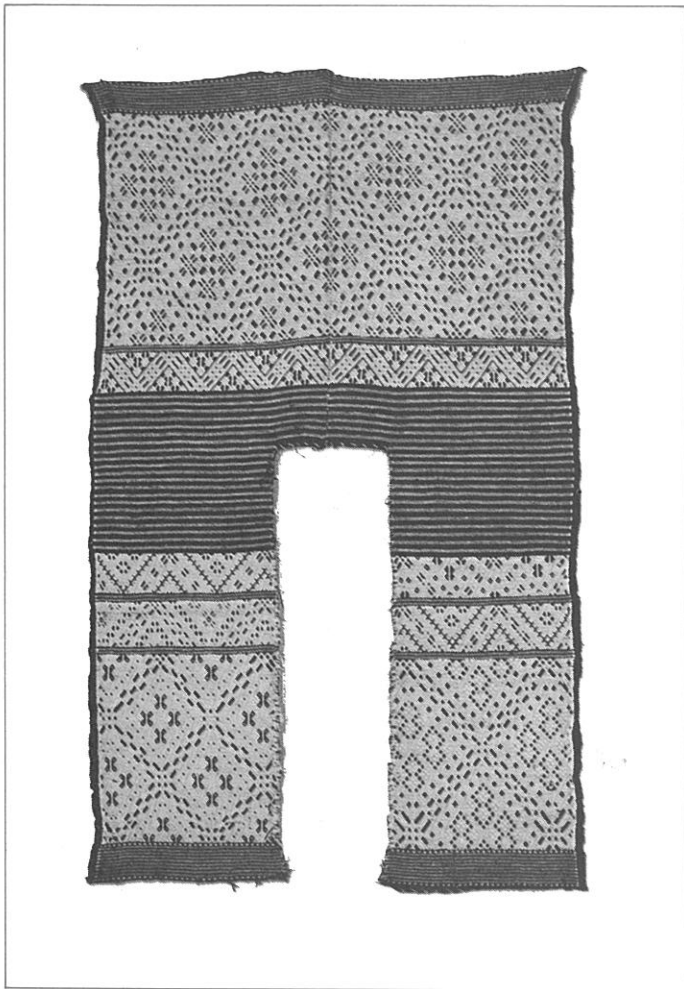
西こぎん (99×58.5cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、

さかさこぶ

前：左、花この柱入9つ合せ、

×刺の井型づくり、島田刺重ね、糸、花こ
右、とまらず糸入4つ合せ、糸、花こ



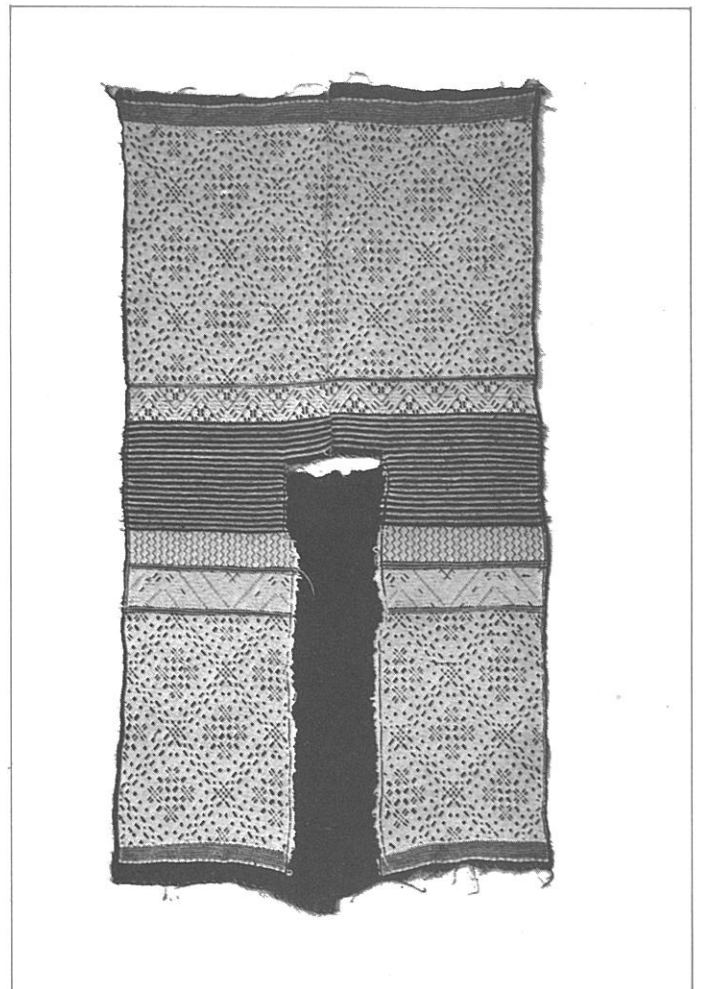
西こぎん (90.7×56.5cm)

後：矢羽刺の花つなぎ4つ合せ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、猫の足糸入4つ合せ、花の矢羽刺、くるびのから糸入

4つ合せ、糸、豆こ

右、とまらず、糸入4つ合せ、糸、豆こ



西こぎん (88.4×47.5cm)

後：矢羽刺の花つなぎ4つ合せ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：結び花の縦つなぎ、井型、矢羽刺の花つなぎ4つ合せ



西こぎん (102×65cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、胸模様、くつわつなぎ、大くるびから糸入4つ合せ、糸、

島田刺

右、ふくべ、つくり模様、とまらず糸入4つ合せ、糸、ふくべ



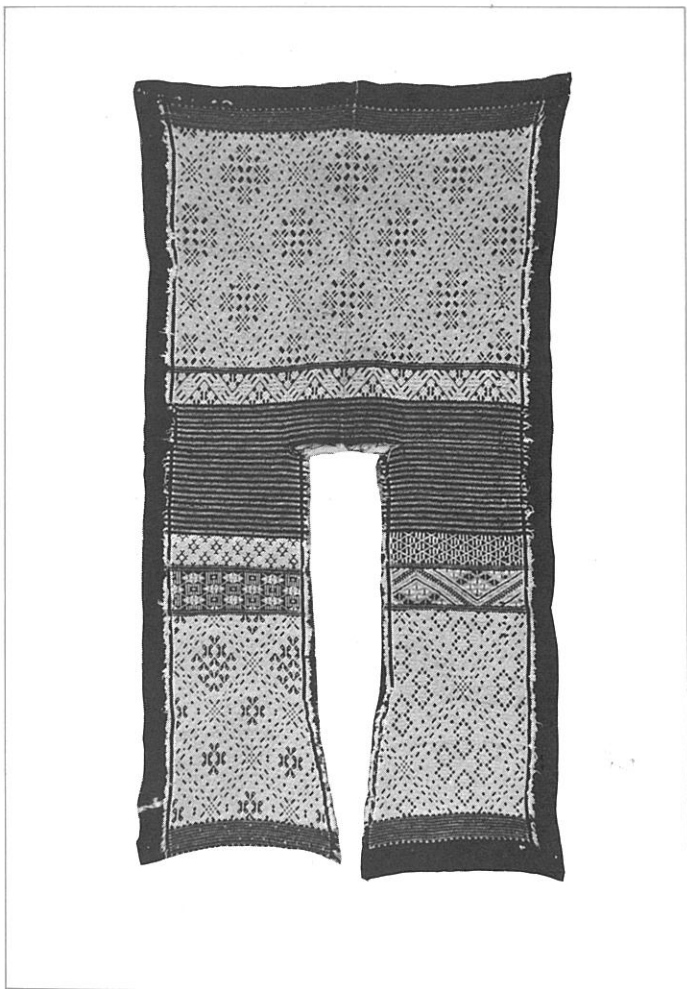
西こぎん (93×53cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、花この矢羽刺、ソロバン刺、とまらずと矢羽刺、糸、

石ダタミ

右、大くるびから、ねずみの園こ、井型の竹ふし、石ダタミ



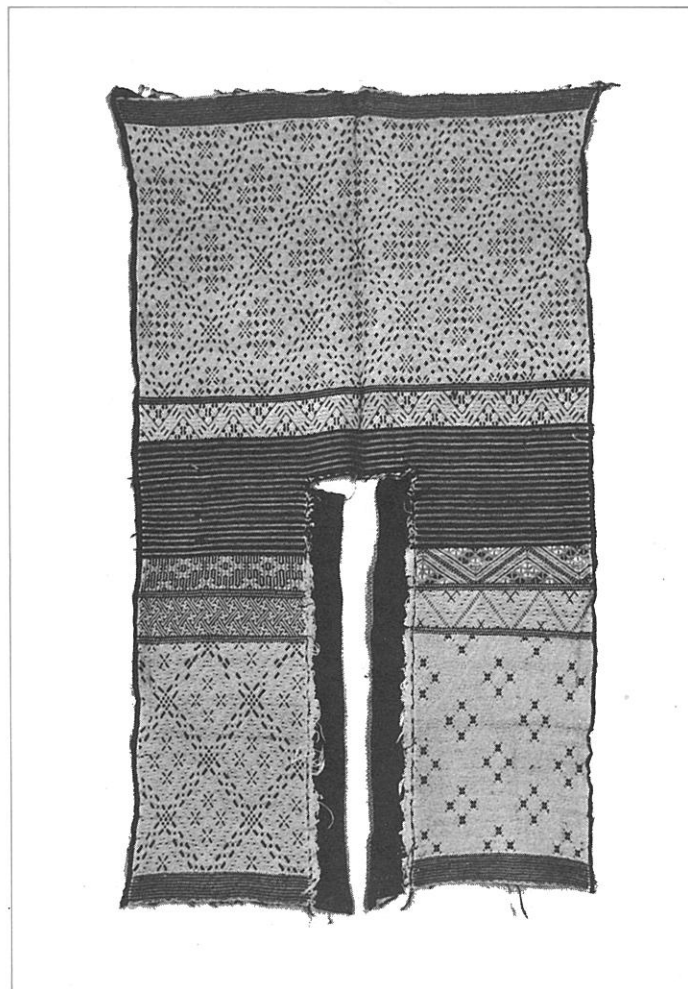
西こぎん (90×51cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、井型、竹のふし、大くるびから、豆こ

右、竹のふし、ソロバン刺、とまらずの糸入4つ合せ、

豆こ、糸

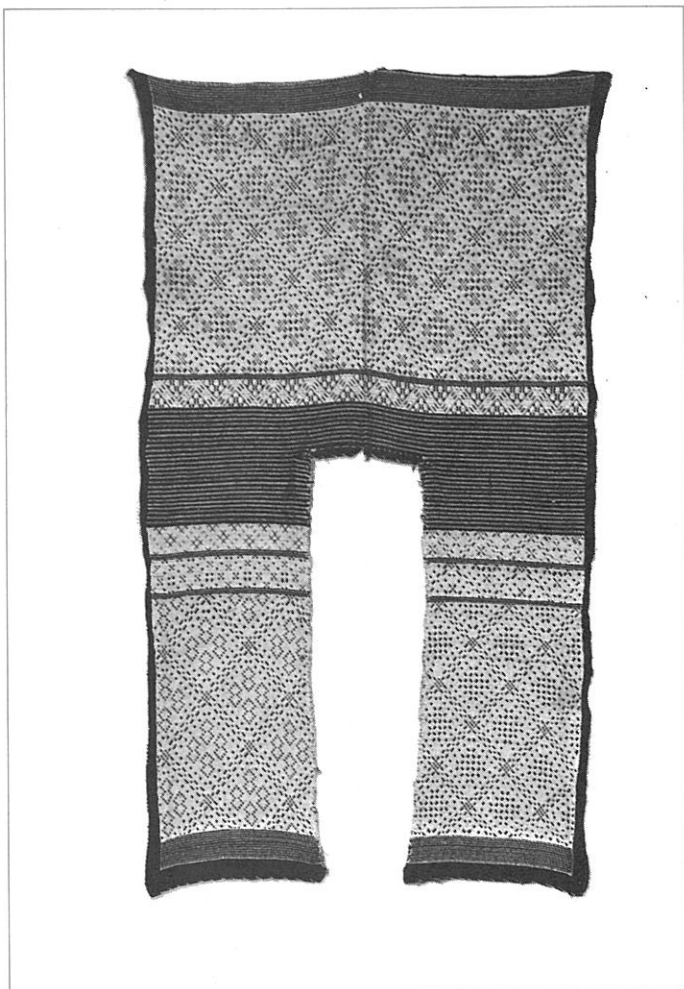


西こぎん (88.3×53.5cm)

後：矢羽刺の花つなぎ4つ合せ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、井型、紗綾型、石ダタミの×刺の糸入4つ合せ

右、ソロバン刺、井型、べこ刺の糸入4つ合せ

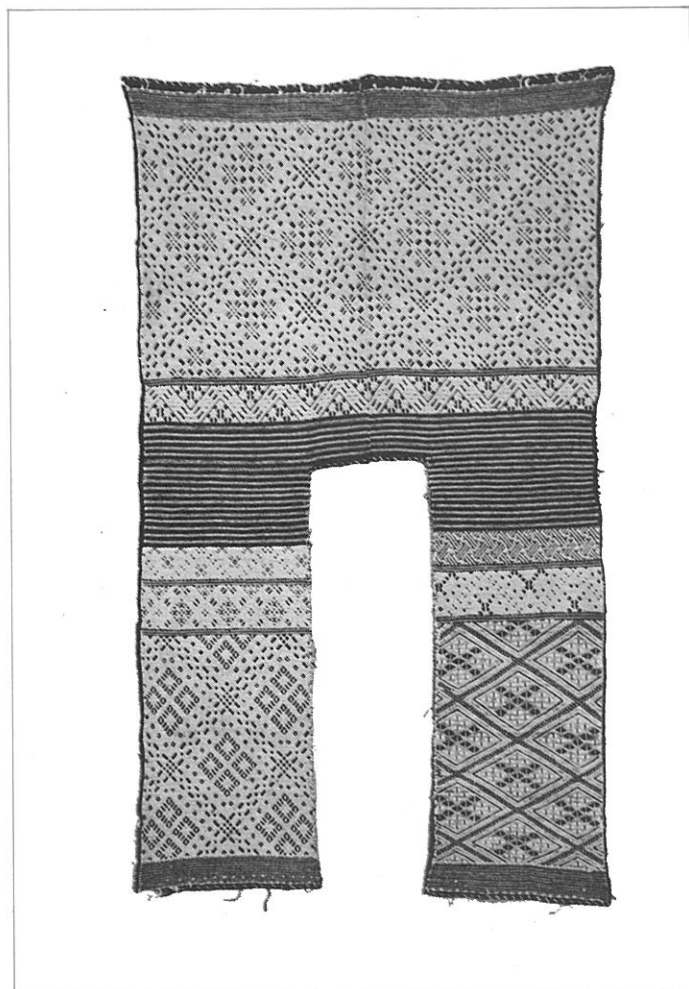


西こぎん (絹刺93×54cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、田のつくろ刺、5つ豆こに花こ流し、とまらず4つ合せ、糸、豆こ

右、石ダタミの×刺、×刺、カチャラズの花つなぎ、糸、豆こ

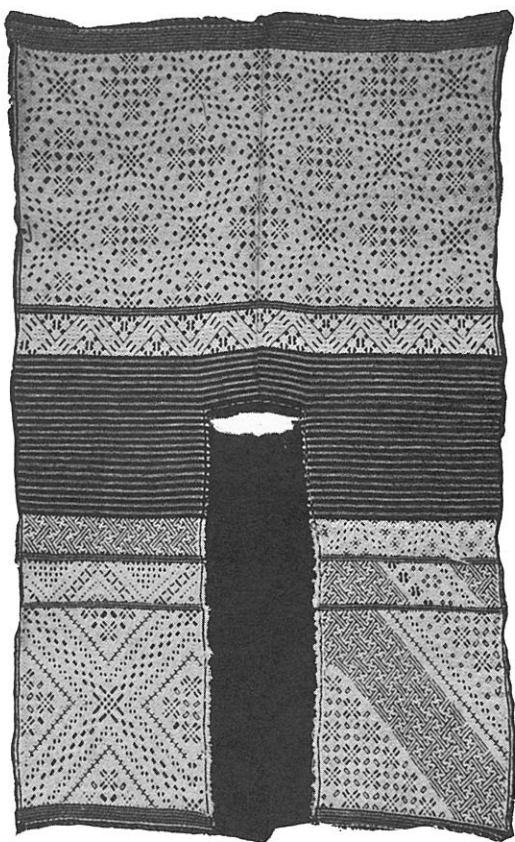


西こぎん (91×54.7cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、糸、豆こ、さかさこぶ

前：左、花この矢羽刺4つ合せ、こごり豆、糸、柱入りの矢羽刺の糸入り4つ合せ、豆こ

右、紗綾型、くつわつなぎ、ソロバン刺

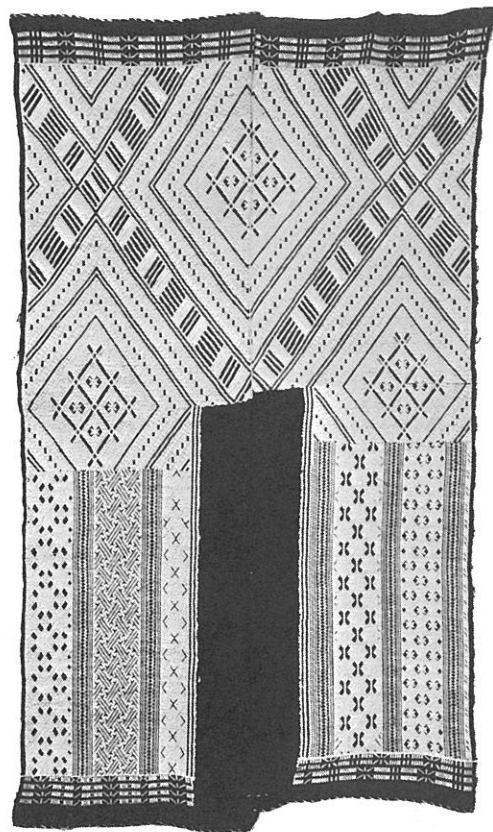


西こぎん (91×56.7cm)

後：矢羽刺の花つなぎ、さかさこぶ

前：左、紗綾型、花こ、矢羽刺の花つなぎ

右、豆この×刺の4つ合せ、紗綾型、矢羽刺

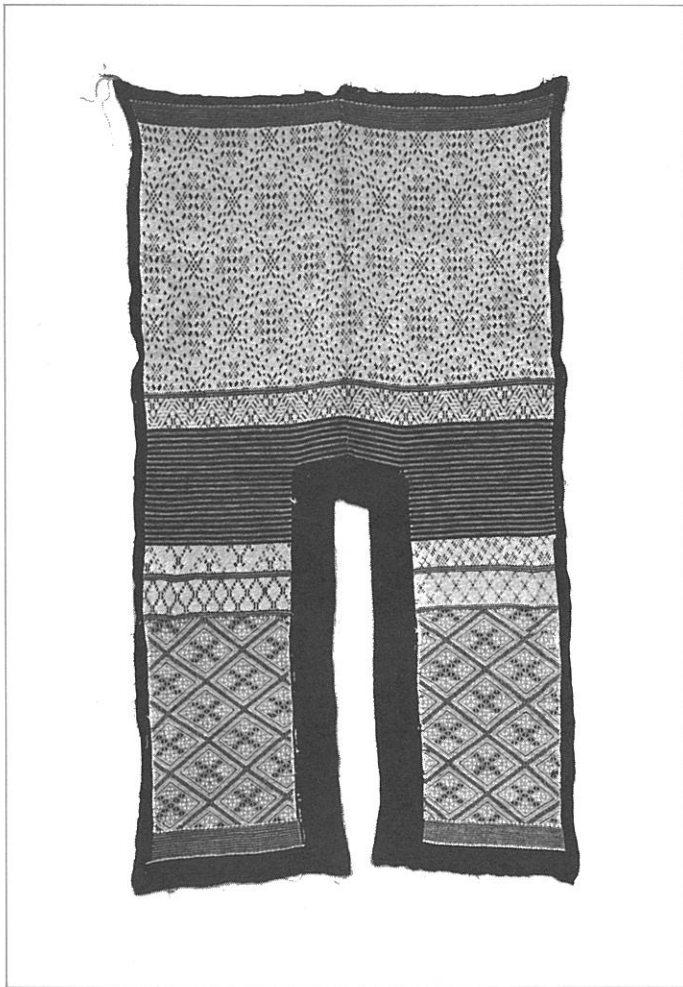


東こぎん (105×59cm)

後：竹のふし、竹渡し、糸、カチャラズ、浮き、石ダタミ

前：左、ヤスコ×刺、竹のふし、紗綾型、4つ豆こ

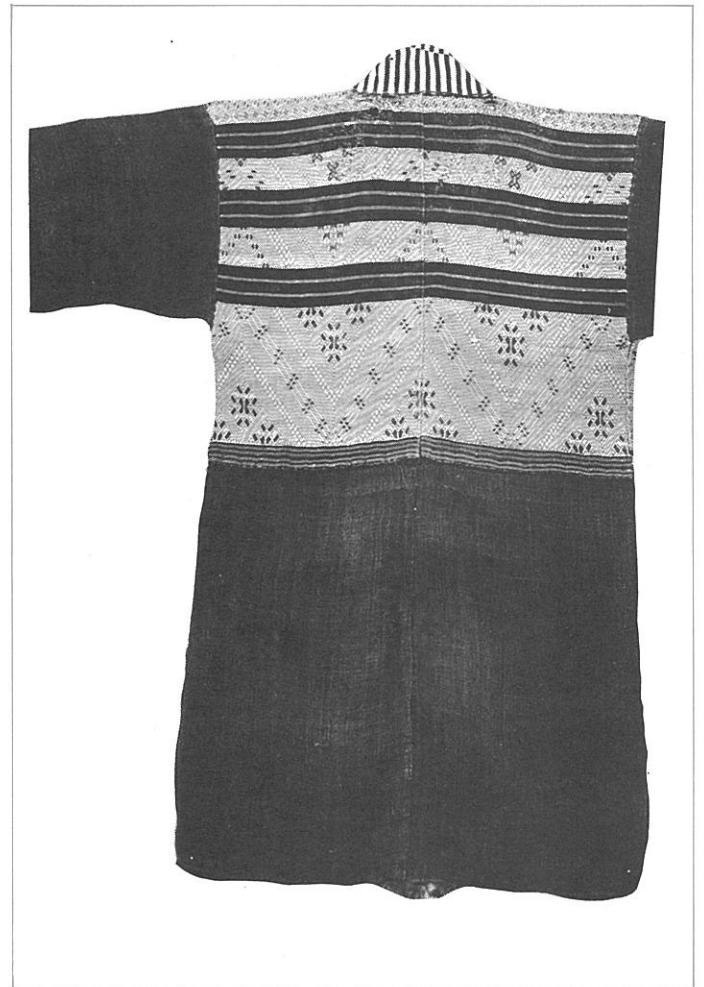
右、竹のふし、てこな、しるびから



西こぎん (93×53cm)

後：矢羽刺の4つ合せ、糸、豆こ、さかさこぶ

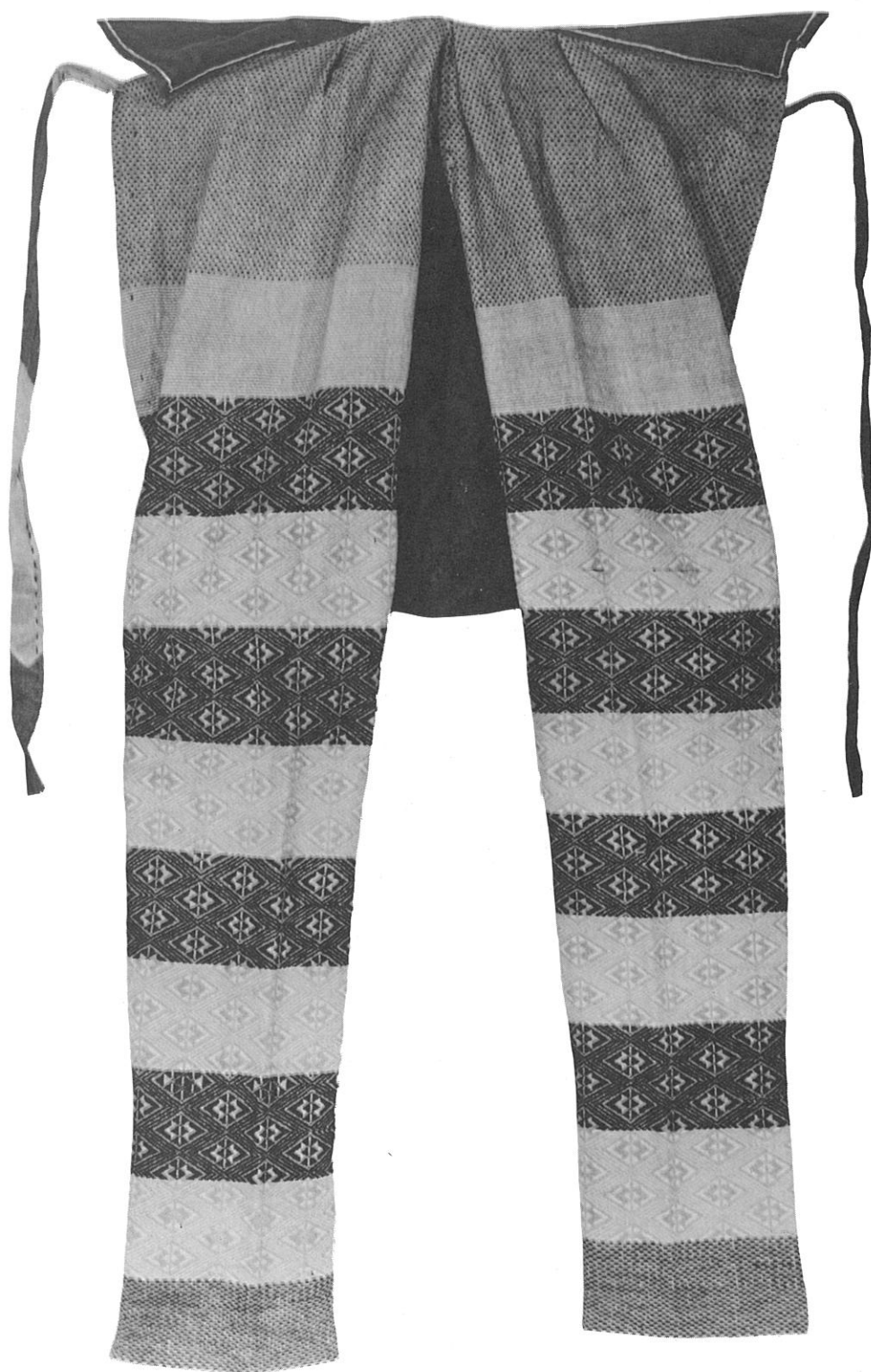
前：左、流れ入りのくつわつなぎ、くつわつなぎ、ソロバン刺
右、井型、花つなぎ、ソロバン刺



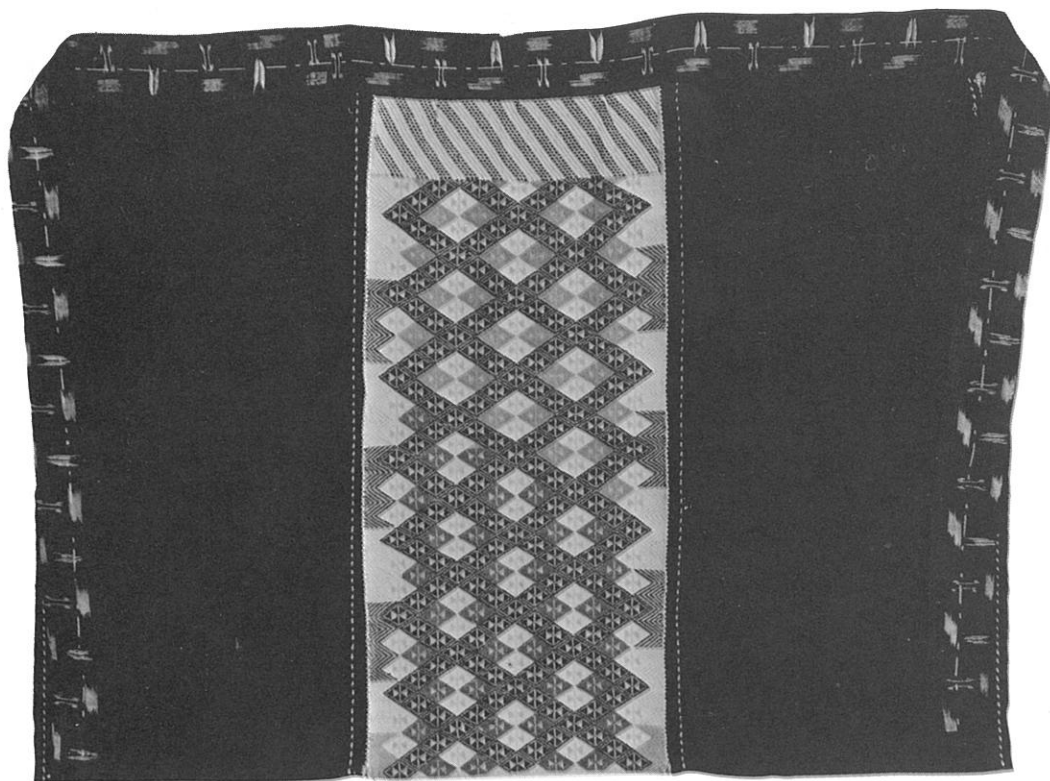
三縞こぎん



三縞こぎん

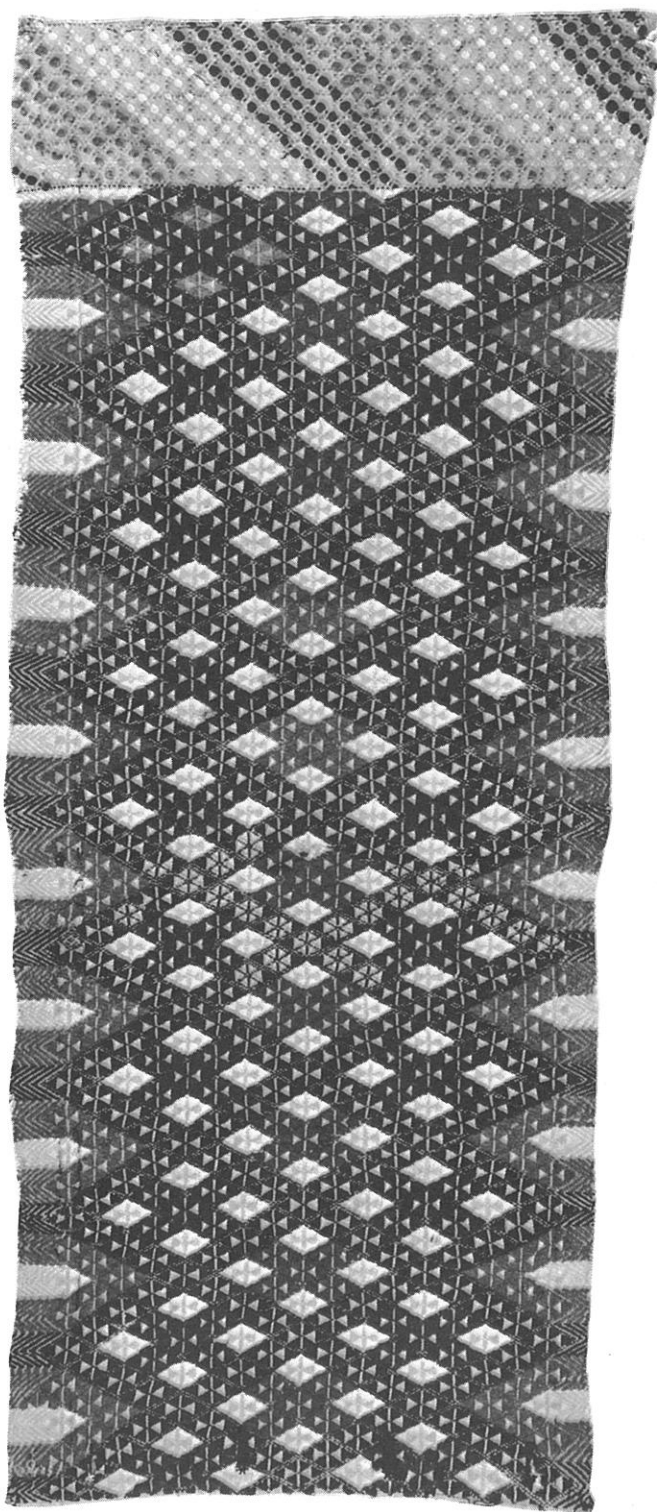


タツ
田つけ
べこのくら

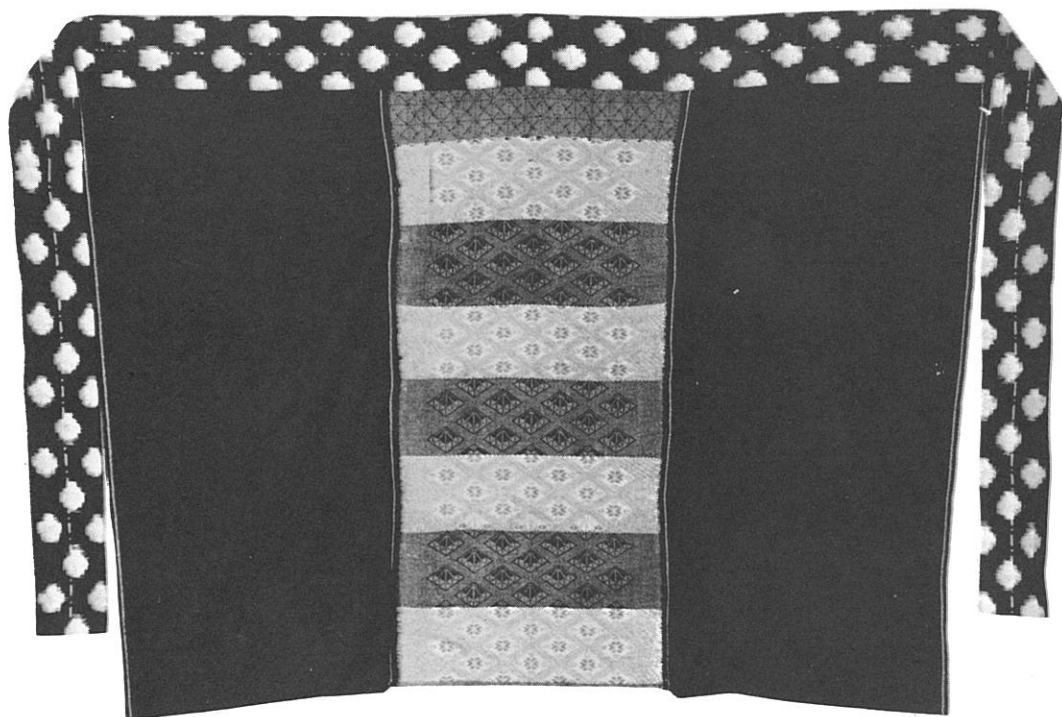


三幅まえだれ (101cm×75.5cm)

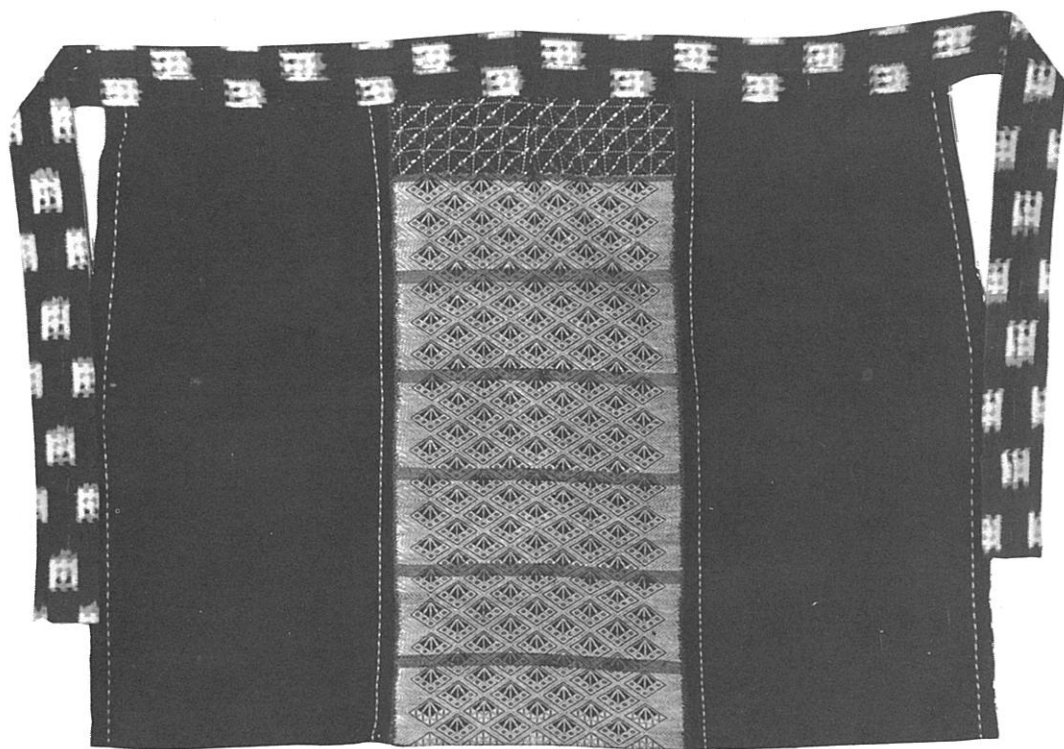
きりのはなこ



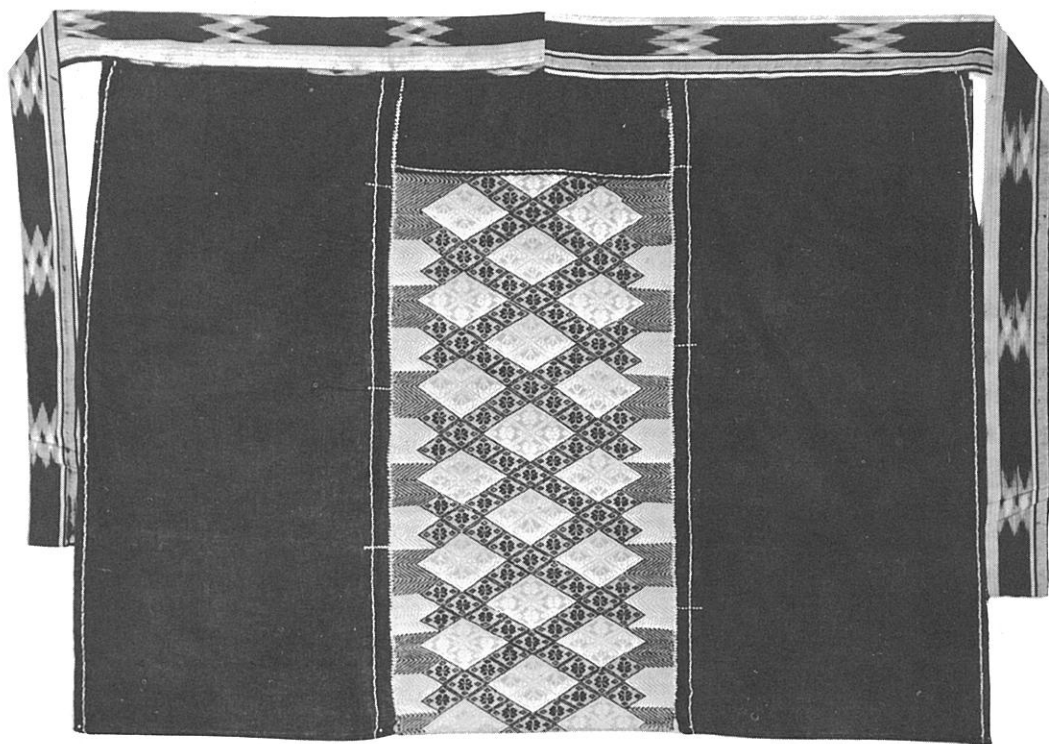
中 幅 (31cm×73cm)
きりのはなこ



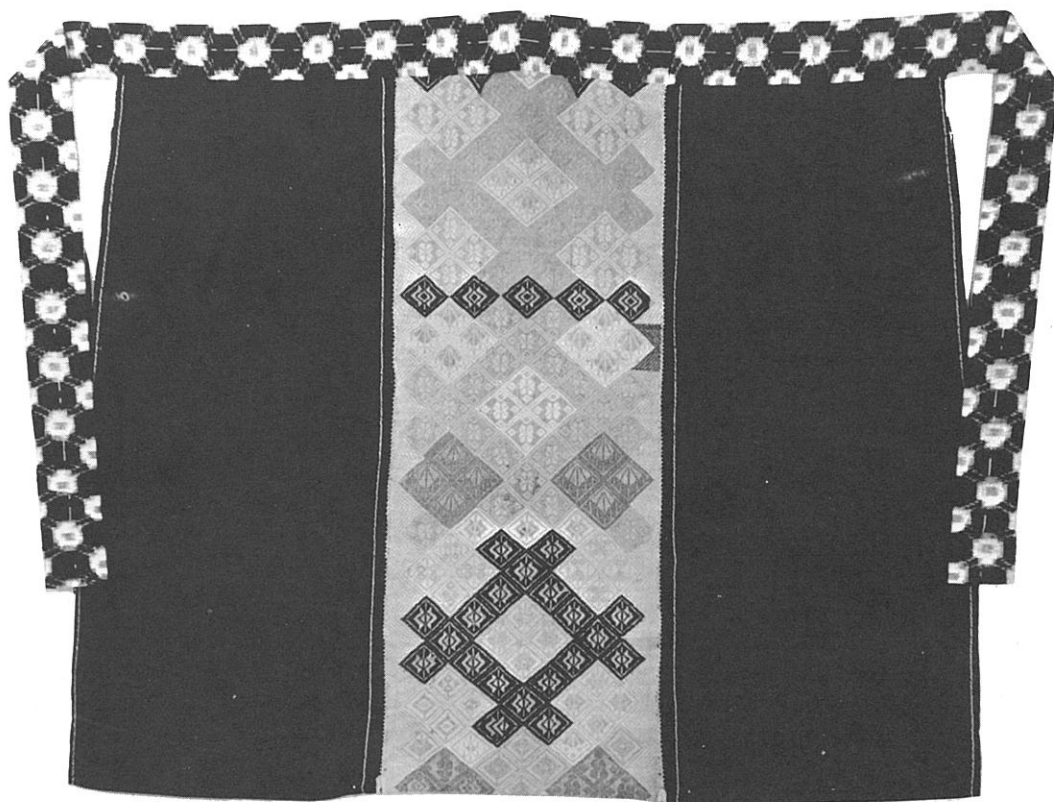
三幅まえだれ (88cm×77cm)
うめのはなこ、きじのあし



三幅まえだれ (73cm×87cm)
きじのあし



三幅まえだれ (75cm×89cm)
うめのはなこ、きじのあし

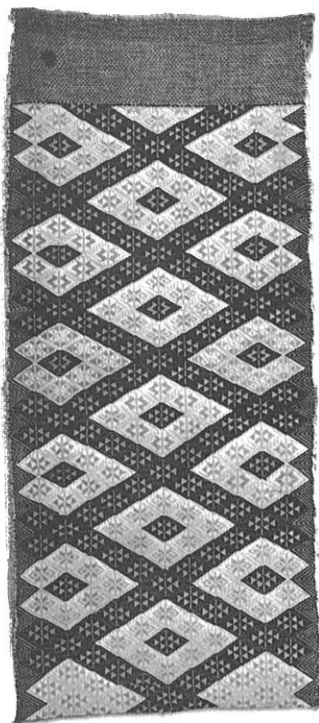


三幅まえだれ (84×79cm)

きじのあし、うめのはなこ、ぺこのくら



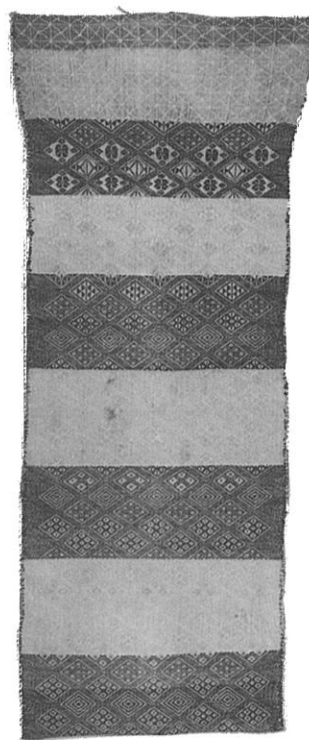
中 幅 (28.5cm×66cm)
きりのはなこ



中 幅 (31.5cm×73cm)
やなぎのはくずし、べこのくら、はなのもんこ



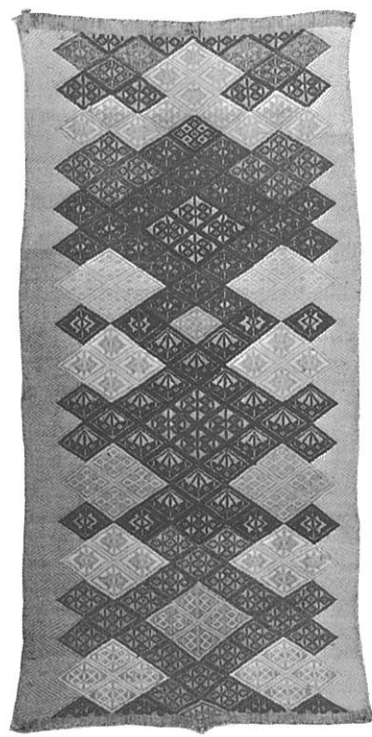
中 幅 (28cm×81cm)
きりのはなこ



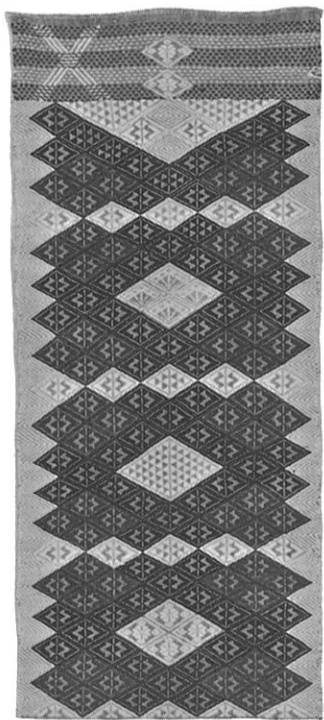
中 幅 (26cm×72cm) 9つ菱、うめのはなこ、きじのあし、あいすげやなぎ、べこのくらくずし



中 幅 (30cm×69.3cm)
くるみざし、べこのくら



中 幅 (34cm×66cm)
べこのくら、きじのあし



中 幅 (29cm×71cm)
うめのはなこ、きじのあし、あいすげやなぎ



中 幅 (28.5cm×68.5cm)
きりのはなこ



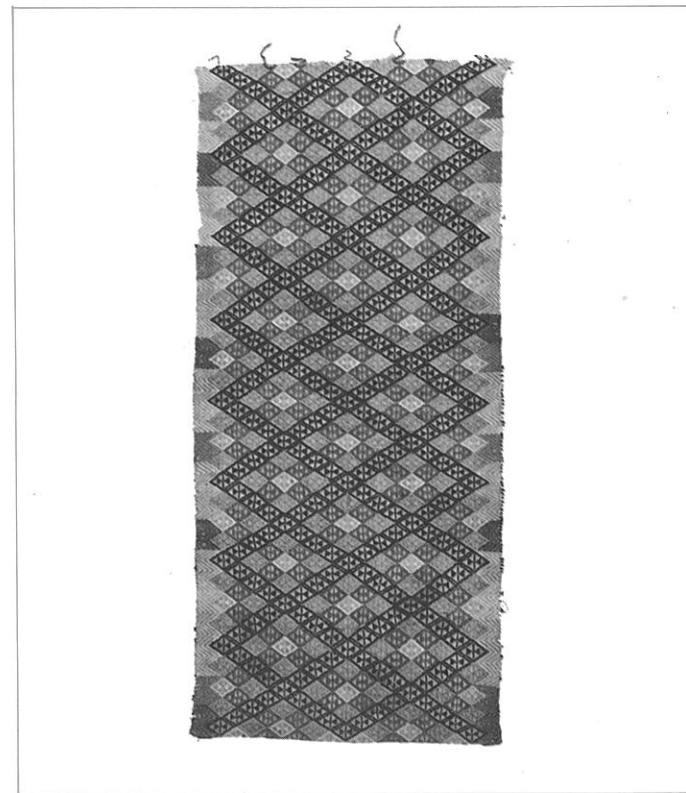
中幅まえだれ (47.5×66cm)
べこのくら



中 幅 (33.5cm×68.5cm)
きりのはなこ



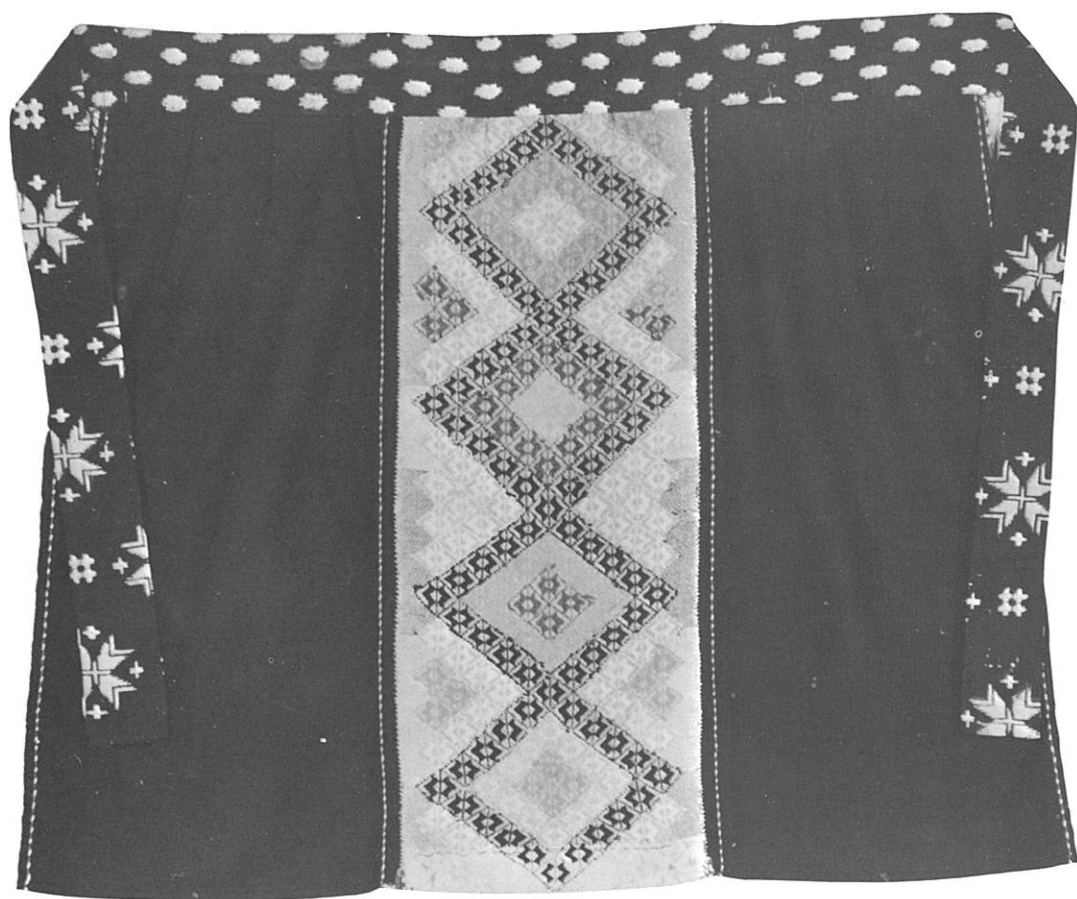
中 幅 (30cm×68cm)
きりのはなこ、べこのあし



中 幅 (30.5cm×72cm)
きりのはなこ

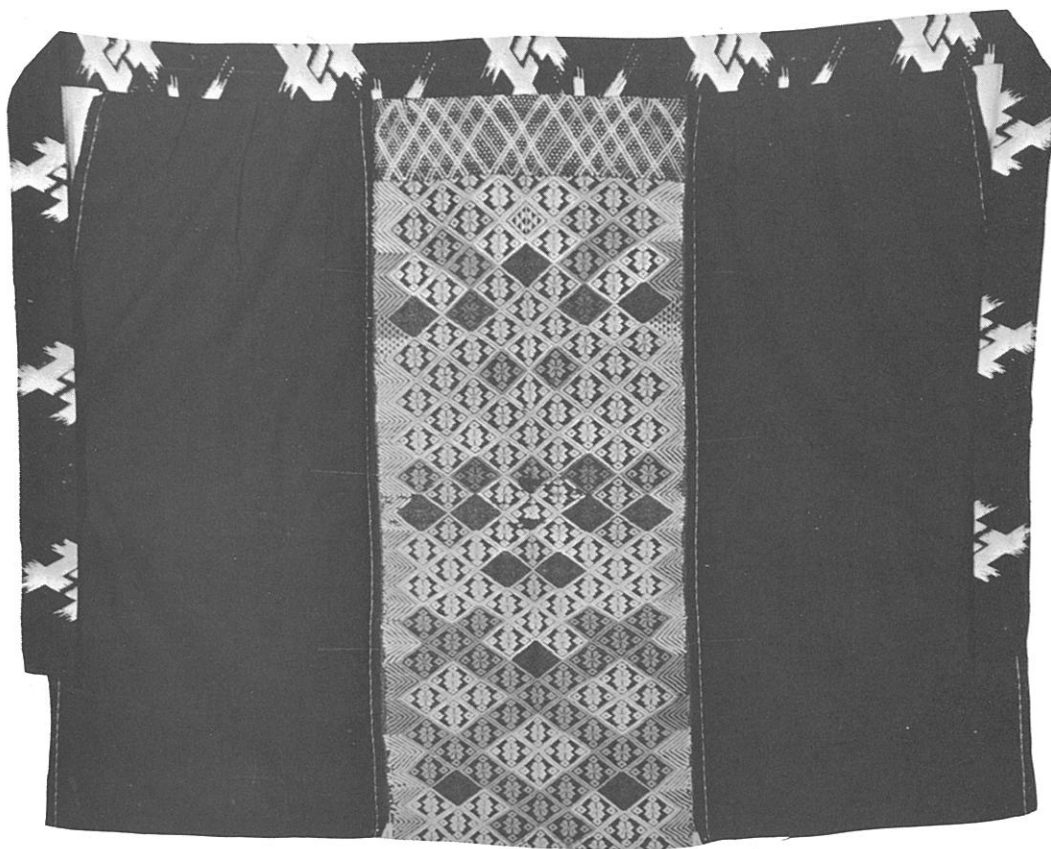


型まえかけ (73×32cm)
(上北町上野)
きじのあし、べこのあし



三幅まえだれ (81×80cm)

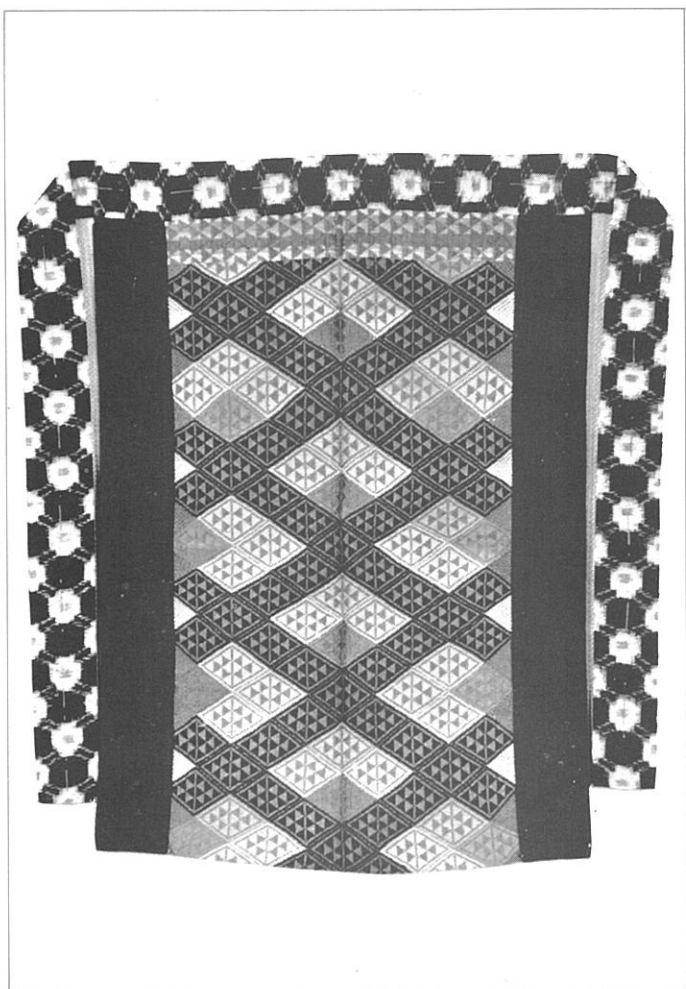
べこのくら



三幅まえだれ (77cm×84cm)
うめのはなこ



三幅まえだれ (86cm×70cm)
やなぎはのくずし



菱まえだれ (100×75cm)
はなのもんこ



手 甲



三幅前だれ (102×65cm)

うめのはなこ、きじのあし、きりのはなこ

津軽のこぎん

戦後、新しいこぎん刺しの復興から始まったこぎんブームは、近年いよいよ高まる一方である。町の書店に入ると、婦人・家庭コーナーに、必ず数種のこぎん解説書が積まれており、駅通りの工芸品店や観光みやげ屋、デパートの郷土物産にも、タコ絵・コケシと並んでこぎん工芸が幅をきかせている。ネクタイ・ハンドバッグ・テーブルセンター・壁掛・名刺入れ・財布など、服飾用品・装身具から小物まで、多彩なデザインと色彩で客足を止める。手作りの親しみ、シンプルな直線模様で無駄がなく、清楚でつましい北方的伝統の香りがもつ不思議な魅力が、人気につながるという。

しかし、こうしたこぎん製品の現状からして、県外から来る人々はもちろん、この土地の若い世代ですら、こぎんというのは、装飾的な目的から考案された津軽の手工芸だと思っ
てはいないか、という気がする。実はこぎんは津軽の農民の労働の汗がしみこんだ仕事着であり、また日常の貧しい普段着であったことを忘れてもらいたくない。

山形県鶴岡市の致道博物館が開館したころ、参観に出かけた。ここはバンドリ（背中当て）のコレクションが特色であるが、驚いたことに、津軽のこぎんに似た刺しこの仕事着がたくさん展示されていたことである。アイ染めの布地に、同じ染め糸でびっしり刺したのもあるが、大胆で単純なマス形・ヒシ形・麻の葉模様などが整然と組立てられた美しい刺繍があって、いずれも庄内地方の作業衣であった。昔の農民が衣料を長持ちさせようとした心くばりが、おのずと美しい服飾図形を生み出すに至った北国共通のくらしぶりを、思わずにはいられなかったのである。

江戸時代中期の天明8年(1788)といえ、190年ほど昔だが、幕府の地方巡見使に随行して東北諸藩を視察した古川古松軒の「東遊雑記」という見聞記がある。一行が弘前に入ったのは、ちょうど盆のころであった。彼はこぎん姿の民衆のさまを、こう書きとめている。

中より下の百姓は、綿入れの衣を貯へ着ること聞かず、麻布を刺子として、寒中は三枚も重ねて着て、事足りぬと云ふ。此日は盆にて御巡見使見物人、在より出ておびただしき事なり。婦人の衣、十人に七、八人までは、白布を紺の糸を以ていろいろの模様を縫てあり。その手際なる事、此所の名産とす。上方の者にては木綿糸をして、かくの如く美しく刺し縫ふ事は叶ふまじと、皆々見物せし程の事なり。当時のこぎんの実態を知るよい資料である。まず、盆に町に出てくるときの女の外出着であったこと、白布に紺糸を刺してあること、津軽独特の考案で上方でも及ばぬほどみごとな模様であったというわけである。

古松軒が見た天明8年と偶然同じ年に、津軽の民衆生活を記録した「奥民図彙」（津軽藩の江戸定府の士、比良野貞彦著）という書物にもサシコギヌの記載がある。“布を糸にてさまざまの模様に刺すなり。甚見事なり。男女共に着す。多くは紺地に白き糸を以て刺す”とあって、この「図録」にも出ている農婦が着ているこぎんの挿絵がある。貞彦が見たのは紺地に白糸で刺したものが多く、大略はヒシ形模様であった。

津軽の農民層には、木綿着用制限が定まっていた当時、衣料をまかなうものは、野生や畑植えの麻からとったイト、それをつむいで機にかけて織ったヌノであった。寒中は3枚も重ね着したと「東遊雑記」にある通りだった。大事な衣料を丈夫で長持ちさせるために、労働できれやすい背・肩・袖口・すそなどの部分を補強のために、ていねいに刺したのがこぎんの始まりであった。

こぎんは小布（こぎぬ）のことで、単衣の仕事着をさすことばとしては、津軽だけでなく広く各地に分布している。津軽藩日記には、元禄8年(1685)からこの用語が見えるという。仕事着を刺して丈夫に着るのは庄内の例もある通り、農民の生活からくる必然の知恵である。津軽の場合、白地やアイ染めのヌノにイトやソメンド（染めイト）で刺したものが、江戸時代も末に近いころから普及し出したカナ（白木綿糸）で模様を刺すようになって、補強の上に保温と服飾の新しい効果が加わった。仕事着・普段着から長着物仕立ての晴着にまで着られるようになったのである。

津軽の長くきびしい冬の間も労働に明け暮れる夏の夜も、炉の焚火やアンドンの灯の下で、村の娘も嫁も主婦たちも、それぞれの期待をこめてこぎん刺しの手を休めなかった。ことに娘たちにはこぎんを刺せることが嫁入りの資格であり、刺した幾枚かのこぎんは嫁入り道具に欠かせなかったのである。

津軽の女の根気と英知が育てた多彩多様なこぎんは、北国のくらしの芸術であるが、その模様が美しく華やかなほど、なぜか哀しく思えてならない。針の運びに秘められた津軽の女たちの、喜び悲しみのいのちの故なのであろうか。

青森県文化財審議委員 森山泰太郎



津軽こぎん刺しの模様と構成 (解説)

津軽地方を三つの地区に分けると

1. 西・北地区 木造町。金木町。車力村。柏村一帯。
西・北津軽郡一帯
2. 中 地区 相馬村。西目屋村。岩木町。中津軽郡一帯
3. 南 地区 浅瀬石。柏木。大鰐町。大光寺。
黒石市一帯。南津軽郡一帯

以上の分布により、1・2・3の順序で説明します。各地区によって名称を異にしています。

1. 三縞こぎん刺し (西。北津軽郡一帯のもの)
2. 西 こぎん刺し (中津軽郡一帯のもの)
3. 東 こぎん刺し (南津軽郡一帯のもの)

この三地区、三種類のこぎん刺しは、一見して地区特有の図柄の構成を型どっています。しかしこれが先でいつ頃に生れたかは、その起源を語る文献は皆無です。

1. 三縞こぎん刺し

小衣(小巾)身頃後 前共にひとしく幾何学的な図案と図案の間に空間を置き、その中程に直線的な図案を置いて縞にして三回くり返し、大きな横段の三つの縞をつくりあげています。(身丈の $\frac{1}{2}$ の間に)下部は幾何学的図案となり、さらに最下部に直線の図案でとめています。(図解1参照)この図柄の構成は西・東のこぎん刺しには見られません。

三縞模様の構成には遠近の立体的表現の工夫のあとがうかがわれますが、模様については後でくわしくのべることにします。

2. 西こぎん刺し(中津軽郡の一帯のもの)

小衣の肩を中心として後身頃と前身頃の図案の構成が異なっています。後身頃は図柄が横段に三分されていますが前身頃は横段に四分されています。肩の部分が殆んど直線的な図案であること、又模様と模様の区切には必ず直線的な図案をおいていることに注目したい。(図解2参照)この図柄の構成は上部が弱い線ではじまり、下部に向って重厚な幾何学的な図案が配置され、強、弱の余韻をはっきり表現しています。

3. 東こぎん刺し(南津軽郡一帯のもの)

三縞こぎん刺し。西こぎん刺しのように直線模様の空間が全くないこと。後身頃。前身頃とも肩山を中心として幾何学的図案を全面に置いていること。三地区共通の図柄の構成としては最下部に直線の図案の配置だけです。(図解3参照)この図柄の構成は全面が一分のすきもなく配置されているので、重厚のなかにも質実、剛健なものがうかがわれます。

以上のように三地区いずれも図柄の構成においてそれぞれの位置づけが明瞭であったのです。

三地区の模様構成についてのべることにします。

1. 三縞こぎん刺し

特徴は上部の幾何学的模様は単独模様の構成ですがその他の他の三つの部分の幾何学的模様は、いずれも模様の構成は中心より半分を上・下して配置しています。(図解4参照)空間の中央には直線模様を三本おいて立体的に遠近間を出す

ための模様の配置に工夫があります。

2. 西こぎん刺し

特徴は後身頃と前身頃と、前身頃の左・右の幾何学的模様の図柄が全部ことになっていることで、他に例がなく、特に直線模様の部分が広いことです。(図解5参照)模様の構成をみてわかるように、奇数および偶数の模様が多種多様です。技術的にも余程の熟練者でなければできません。一見して左・右が異なるのでその特徴が理解されない場合には、間違ったのではなはいかとの錯覚をおこすこともあります。又西こぎんでは、東こぎんと等しい全面特に背巾一杯に構成した組合せ模様の全体模様の構成もあり、非常に豪華な模様構成です。以上の点からもこの地区にもっともすぐれた女性がいる、創造し模様の構成に工夫を生み出したのではないかと推察されます。現在も古い作品が多く残っているところからも、刺す人も多かったと思われます。

3. 東こぎん刺し

特徴としては、幾何学的模様の単独模様の全面構成と、単独模様を実として、畦模様を多種多様にとり入れ組み合せた模様をモチーフとしています。これを枠模様で囲み全面に模様を構成しています。(図解6参照)全面の模様の構成は、模様みずからの強、弱を浮きぼりにして、他の二種類にみられない重厚さと正確な美しさがあります。

模様の基礎について

直線の模様には刺しこがすべての基礎となって、美しい線を表わしていますが、又反面模様の割り出しの尺度の役目としても重要です。

その応用には 1. 市松模様 2. 竹の節(数種あり)

3. 鋸の歯(数種)等がある。

幾何学的模様で、模様の構成の基礎となるものは三種類で、

1. 豆 2. 糸入り豆 3. 九つすじあげ があげられます。

その応用。この三種の基礎をいろいろ組合せて、素材の物体を図案化して表現し。単独模様を構成しています。

(例) 1. くるみのから(数種) 2. ふくべ 3. 井戸枠

(数種) 4. 蝶々 5. 猫の目 6. 猫の足 7. 牛の足

8. くつわつなぎ 9. 四つ菱 10. 矢羽 11. 花っこ

(数種) 12. うろこ 13. そろばん刺し 等代表的な模様

は三地区殆んど共通であったと思われる。これ等の模様をみる度にその当時の女性の創造性と工夫力の旺盛だったことに驚異を感じるのです。

幾何学的模様には、たとえば背中一杯の大きな模様がありますが、それには名称がなく、中心の単独模様を(実)とよび、その周囲を囲む畦模様を一つ一つ呼んで、名称を解明するのです。こうして構成する幾何学的模様は、計算し割り出して、その数が正確に割りきりねば一つの模様として用いられないのです。

こうしてできた模様を、全体的に図柄として全体模様に構成するのです。

全体模様の中心は小衣の肩山におかれるのです。模様の構図を解明する時は、必ず肩山の中心を見て読むのです。

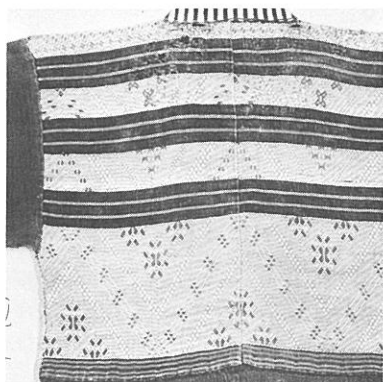
幾何学的な模様の構成には、割り出しと読みとを書きとることが大切なことです。

図案の構成が終って、はじめて刺すことになります。刺す

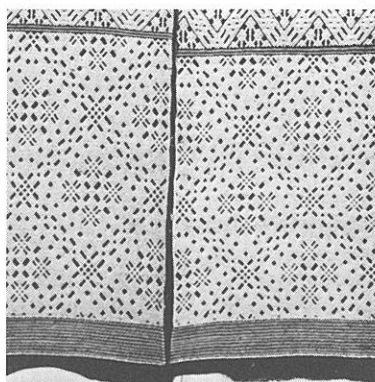
場合どこが、はじまりかということ、肩山が針立ての位置となります。

以上で津軽こぎん刺しの見分け方、図柄の構成と模様の特徴および幾何学的模様の基礎とその構成について、一通り終わります。
こぎん研究家 工藤得子

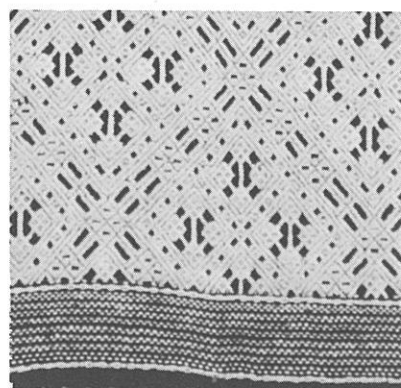
第 1 図



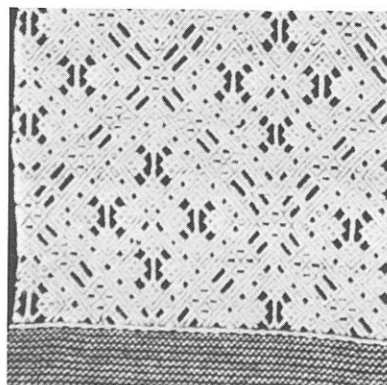
第 2 図



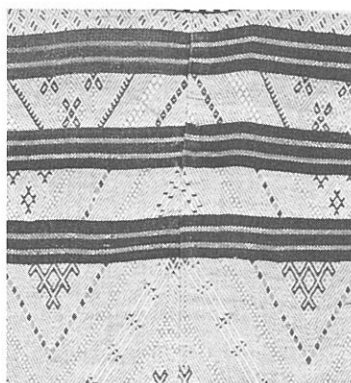
第 3 図



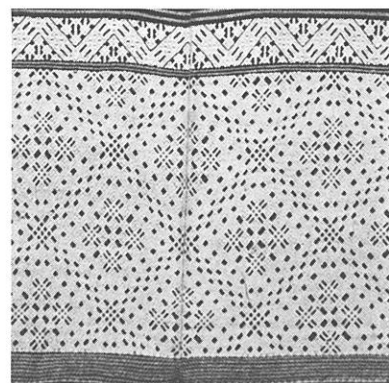
第 3 図



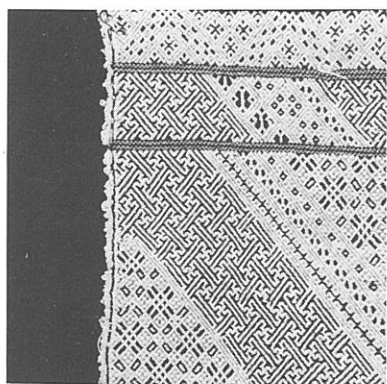
第 4 図



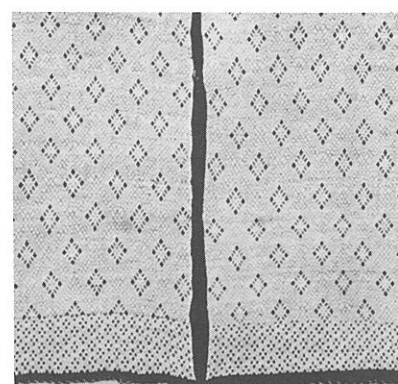
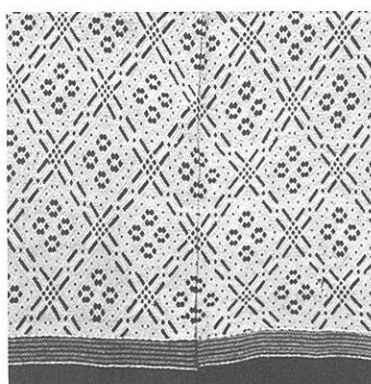
第 5 図



第 5 図



第 6 図



南部の菱刺

はじめに

菱刺とは、南部地方の刺子着の一種で、浅黄や白浅黄色に藍で染めた布の布目を、白や紺の木綿糸、時には色木綿糸または毛糸で、針目をずらしながら偶数率で筋上げし、菱形を基調とした紋様に刺し上げていったものであり、そのすぐれた美しさは、津軽のこぎん刺とともにわが国刺子界の双壁とされているものである。

菱刺以前

明治期を迎えるまでの久しい年月にわたる南部地方農民一般の衣料は、麻・苧麻・アイコ（蓴麻）等の繊維で織られた布であった。

冬が長く寒いこの地方では、布が単で着用されるのは、夏のごく短期間に限られ、他の期間は、補強と保温を目的とし、布二枚を重ね合わせて、麻糸で横段に刺したツツレが用いられた。

江戸時代中期やがて木綿の古着や木綿糸がこの地方に入ってくるにつれ、裁縫の便という効用も加わって、ツツレの裏地は古着に、刺し糸は木綿糸に変わった。

上衣であるミジカ・ソデナシ・テッポウ・マガナイ等は浅黄または白浅黄に染めた布を、紺の木綿糸で、二筋上げ、二筋下げ、八筋飛び（六〜七ミリ間隔）に横段に布目を上げ下げするグイ縫いに刺した。

これが下衣であるタツツケ・股引になると同様に染めた布を、はじめ六〜八センチ幅に白の木綿糸で、二筋上げ、二筋下げ、二筋飛びに、グイ縫いに密に刺し、次には紺の木綿糸で同様に刺すといったふうに、交互に色違いに、密に刺すことにより、ダンダラ紋様の美しいあやを出すことに成功している。これはささやかな美へのあこがれが実を結んだ最初であった。

下衣はまた、時にはアヤスギ（綾杉）紋様に、ダンダラに刺したり、アヤスギとグイ縫いを交互に交ぜ、組み合わせ図案化したりもした。

三幅前垂れの中央の一幅も同様であり、あやの美しさを見せた。

菱刺の名称

津軽のこぎん刺については、江戸時代後期の二、三の紀行文に散見するが、南部の菱刺については、不思議とこの種の記録がなく。その歴史については未知の分野が多い。

小井川潤次郎氏は、この点につき、三幅前垂アヤスギ紋様について記したのち、「そのあと『梅の花』や『ソコバン玉』『九つ菱』『花の紋こ』『雉子の足』『柳の葉』などが刺された。アヤスギを主調として刺されるこれらの文様は横なりの菱形になってつながったので、ヒンザシ・フシザシ……とも呼ばれた。」と述べ、また「何処かで誰かが作り出したものか、土地土地で、何時となく発達したもので……」とも述べ、菱刺という名称はその菱形に由来すること、アヤスギから菱刺へと発達したものであることを示すとともに、発生の時期・場所、考案者等についてはこれを限定していない。

これら菱形を基調とする紋様は、上衣・下衣・前垂等に刺されたが、その時これらは、フシザシのミジカ、フシザシのタツツケ、フシマイ、フシマイダレ、フシマイガゲ、フンザシの三幅マイガゲ、型前垂等と呼ばれた。

分布と発生の時期

一般に「南部の菱刺」と呼ばれるが、菱刺は旧南部藩領の

うち、今岩手県に属する地方にはほとんど見られず、八戸市を中心とする旧八戸藩領、旧南部藩領のうちの三戸郡地方・上北郡地方一円に広く分布し、特に、八戸・五戸・七戸周辺を中心として発達した。

菱刺は、川筋の村々に発達し、漁村には発達しなかったともいわれているが、市川・二川目その他の漁村にはすばらしい菱刺の前垂がみられる。

これら菱刺の始期は前述の如く明瞭でないが、小井川氏によれば、現存する菱刺の最も古いものは安政三年（一八五六）五戸で作られたものであるという。

してみれば、菱刺の始期は勿論それよりは古いであろうが、どこまで遡れるであろうか。

一、江戸時代後期、津軽と南部を歩いた旅行者が、津軽のこぎん刺について激賞しながら南部の菱刺については一言もふれていない。

二、こぎん刺が、紺の布地に白木綿糸で刺す技法を伝統にまで高めたのに対し、菱刺は菱形に刺すという制約は守ったものの、色木綿糸や毛糸を刺し糸として用いるという変化を求めている。

三、南部・八戸両藩では、日常木綿の着用を許したため、木綿の着用、特に晴着としての着用が予想以上に多い。

等の諸点から考えると、南部地方における菱刺の始期はあまり古いものではなかったように思われる。

菱刺の発生ないし発達とこぎん刺との関連については、関係ありとするもの、なしとするもの等諸説があり、また、津軽領の平内や南部領下北川内には、こぎん刺と菱刺の混合形態が見られるとするものもある。

事実、クツツツナギ等こぎん刺と菱刺とに共通の紋様もあり、両者間に何等かの交流があったことは想像されるが、一方また旧南部領の鹿角地方に菱刺の起源を求める考方もあり、いまだその起源については、定説とすべきものがない。

菱刺の美

南部のツツレ・菱刺等の布は、ほとんど青空色の浅黄もしくは水浅黄色に染められている。それは、どんよりと曇った暗い空の下にきびしい生活を強いられてきた南部地方農民の青空へのあこがれのあらわれであろうかとうかがわれ、何となくもの悲しさを感じずにはおかない。

こぎん刺にみられる白と紺の、濃淡のはっきりした対照にくらべると、古制を保った菱刺には、こぎん刺ほどの対照の妙はないが、その色彩的単調さを補ったのが、白と紺の木綿糸によるダンダラ刺である。

一見それは、地布を白と紺とに染め分けたかと思まごうほど美しい。

しかし、それにしても、清楚であり、つましやかであり、淡寂である。

菱刺の紋様は、偶数率刺の技法の故に、菱形の枠をぬけ出すことが出来ず、こぎん刺の流れに相当するものがないため、こぎん刺に比し単調さを免れることが出来なかったというのが定評であるが、筆者は、菱刺は、意識的に菱形の枠を固守したものとの念を持っている。

菱形は、いうまでもなく南部氏の家紋武田菱に通ずるものであるからである。

だが、南部の人達もやがてこの菱形を横に連ねるだけの単調さに気づいた。そしてその単調さを救う方法として、三幅

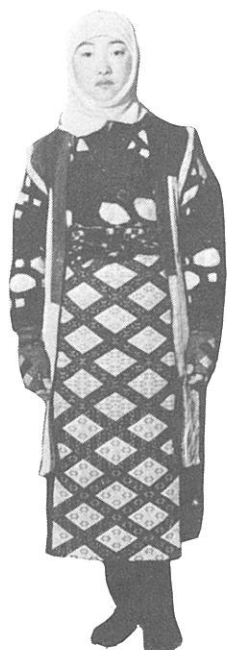
前垂れに見られるような、菱形の単位紋様を左右に斜に連ねて大きな菱形もしくは井桁を作り、さらにその枠内にも菱形の単位紋様を刺込むことにより、菱形の制約を守りつつ、流れの効果を出し、スケールの大きなものにすることに成功した。

しかも、色木綿糸、色とりどりの毛糸を巧みに配することにより、菱刺は、百花繚乱たる花園にもたとえられるべき、大

胆にして絢爛たるものとなるに至った。

きびしい生活の中にも、南部人たるの誇りを胸に秘め、明るい未来を夢みることを忘れなかった南部乙女達のやさしくそしてたくましい心がこのような、時には淡寂な時には華かな菱刺を作りあげたものであろうか。

青森県文化財審議委員 盛田 稔



菱刺の前掛け
大正の末期。菱刺の前掛けをした農家の娘さん。

野菜売りの女
大正時代に見られた野菜のふれ売りの服装。菱刺の三幅前掛けをしている。(八戸で)

【写真説明】

バオリの娘さん
手に持っているのは三戸郡五戸・蛭川産のバオリ。

菱 文 様 讃

菱刺の古作を見るとときいつも私は、菱刺は穏やかで、あたたかく、見る人の心を静けさに導いてくれる、とおもうのです。

又、藍や麻を天恵と感謝し、合掌し、用いたであらう昔の南部の女の人のところをも思いやるのです。

私と菱刺との最初の出会いは、二十余年も前のこと。その日に見た三巾前垂は、百年以上も昔の土の香りのただようものでした。

ところどころ刺し糸もカスレていて、労働に長く愛用された傷みをもつ前垂で、思わず「ごくろうさんでした」と、声をかけたい気持ちになったのを覚えています。

生地は浅葱色の麻布、

刺し糸は、もめんの縫糸（カンナ）、黒カンナ、白カンナの二色。

文様は、九菱とウメノハナコが交互にだんだら縞に刺されていて、それは素朴な趣のものでした。

黒と白の二色の糸の変化の極限をもうかがわせるもので、その美しさはおどろきでした。

生地は浅葱いろとの三色が、かもす色の不思議な効果は、飽くことのない深い魅力をかたちづくっていました。

菱刺の主な用いどころである、三巾前垂は、青森県域の南部、八戸、七戸、五戸、三戸、地方の農村一帯にゆきわたった風習の所産で、中央に菱刺繡をした麻布を置き、その両側に一幅ずつのハナイロ木綿をつけ、紐は紺がすりのいわゆる前掛のことです。幅広の紐は二巻きして前に結び、帯の代用となり、工夫し美しく刺した前垂は、盆や祭りのときの晴着とし身を飾ったときいています。

はじめて菱刺の古作の美しさにふれて心を奪われた、二十年前の出会いの日から、私は身に近く麻布と、もめんの刺し糸をひきよせて、今日まで菱の文様を刺すくらしをしてきました。古作を見るだけでなく、自分で刺すことによって、菱刺を理解したかったのです。

細かい麻布の目を拾い刺すことの大変さは見ているだけで推しはかっていたソレとは大違いで、気の遠くなるような根気のいる手仕事でした。明るい電燈の下でも、困難な菱刺を昔の人は、行燈や、イロリの焚火のうす暗い部屋で、どうして刺し得たのかと、不思議でした。が、自分で繰返し刺すことによって多少の理解が届くようになりました。

それは、実技の積み重ねというか、繰返し繰返し刺すことによって、刺す指先が自然に布目をすくうために難なく動くようになるということを知ったのです。

事実、昔の農村では女の子が五・六才になると、遊びとも戯れともつかぬかたちで、祖母や、母、或いは姉達から麻布に

「サシコ」を教わったときいています。幼時から刺しはじめるということは、衣を大切にする心がまえが培われるだけでなく、先にのべた理由で、うす暗いあかりをたよりにしての細かい菱刺もなし得る素地がつくられたのでした。

東北では麻布をノノというのが一般で、青森県の八戸や五戸地方では、「コギン」の語はなく、ノノをまたツツレといい、ノノ刺しをツツレザシとも言ったのですが、単なる地刺しが、アヤ模様となり、更に進んで杉アヤに、そして発展的に自然に菱文様が生れ、それが現在の菱刺の技法なのです。

「南部の菱刺」も、「津軽のこぎん」も他の地方で行われている目を拾わず、いわゆる雑布を刺すように、ただ刺す「づぶ刺」と違い、目を拾ってゆくとところに特色があります。

大体装飾を目的として生れた他の刺繡とちがい、物を大切にしようとした昔の人々の涙ぐましい執心と、家族の者へあたたかいものを着せたいという、いわゆる生活の手工から生み出されたもので、この出発点での違いも特色といえましょう。

右の二つの特色は、菱刺、こぎん、共通のもので、文様は悉く直線だけからなり、曲線が全く含まれていない点も共通しています。

「菱刺」と「こぎん」の違いの方は、こぎんは最後まで紺と白の二色であったのが、菱刺は、ハナダ色に紺や白で刺されたものが後に糸で刺されるようになったことと、次にあげる技法の違いがあります。

こぎん刺の技法は、布の筋上げを、一、三、五の奇数で行い、繊細な感じに、菱刺は二、四、六の偶数で筋上げをし、大まかな華やかさを刺していきます。

筋上げとは、たとえば、二筋上げは、運針の針はこびのときに、布の手を二筋すくい、二筋おさえることで、四筋上げとは布目の糸を四本すくいあげ、二筋を針で押え下げることで、この筋上げの奇数目、偶数目によって、こぎんは、「たて菱に」菱刺は「よこ菱」に形づくられるのです。

偶数目に拾い刺しする「サシコ」の手工（てわざ）が、いつか手の込んだ文様にと発展し、それらは美しく愛しい名称で今に伝えられているのです。

ウメノハナ、牛の轡、ソロバン玉、雉子の足、石だたみ、梨っこ、柳の葉、等々です。

菱刺は、刺子の華なのです。

菱刺の古作には、どれもそれを刺した人の愛情の深さが示されていて、私は美しい菱刺は、愛情と、一生懸命の心のはたらきによって生み出されるものであると、こんにち思い至っております。私も昔の人の心を、自らの心として今後も菱刺をつづけてゆきたいと念じております。（松岡 加恵）

展示資料一覧

津軽の刺しこぎん

種 別	点数	所 有 者
東 こ ぎ ん	23	弘前市 櫛引元三氏
西こぎん(着物)	3	〃 〃
西こぎん(絹刺)	1	〃 〃
西 こ ぎ ん	28	〃 〃
三編こぎん(仕事着)	3	金木町 金木さなぶ(荒馬保存会)
三 編 こ ぎ ん	2	弘前市 相馬貞三氏
二重刺しこぎん	1	青森市 工藤得子氏
紺染刺しこぎん	4	〃 〃

南部の菱刺

種 別	点数	所 有 者
三 巾 前 垂	1	八戸市 小沼 勉氏
中 巾	6	〃 〃
手 提 甲	1	〃 〃
手 袖	1対	〃 小井川カツ氏
小 布	1対	〃 〃
中 巾	1	〃 〃
中 巾	3	〃 〃

種 別	点数	所 有 者
タ ッ ツ ケ	3	七戸町 盛田 稔氏
着 物	2	〃 〃
模 様 見 本	2	〃 〃
麻 地	2	〃 〃
三 巾 前 垂	10	〃 〃
中 巾	11	〃 〃
着 物	1	〃 〃

参考文献

- 日本を知る事典 社会思想社 S. 46
- きもの 瀬川清子・未来社 S. 47
- 民俗民共双書 宮本馨太郎・岩崎美術社 S. 46
- こぎん 横島直道・青森民芸協会 S. 41
- 津軽こぎん 横島直道・日本放送協会 S. 49
- 津軽こぎん刺し 工藤得子・主婦と生活社 S. 51
- 津軽こぎん 日本ヴォーグ社 S. 51
- こぎん 雄鶏社 S. 49
- 工芸14号津軽の「刺こぎん」 村岡景夫 S. 7
- 〃 南部の「菱ざし」 小井川潤次郎
- 津軽藩政時代に於ける生活と宗教 小館衷三・津軽書房 S. 48
- 津軽覚え書 弘前図書館編 S. 49
- 奥民図彙 県立図書館双書五 S. 48
- コギンの史的考証 松野武雄・県政のあゆみ S. 29
- 「菱刺繡」縦横記 小井川潤次郎・県政のあゆみ S. 29
- 津軽の刺こぎん 横島直道・県政のあゆみ S. 30
- 現状及び復興についての諸問題—
- みちのくの造形 小井川潤次郎・東奥日報 S. 37
- 高橋一智・ 〃 S. 38

第9回特別展示

刺しこぎんと菱刺

発行日 昭和51年10月13日
 発行所 青森県立郷土館
 〒030 青森市本町2丁目8-14
 TEL 0177 (77) 1585 (代)
 印刷所 第一印刷株式会社
 〒030 青森市古川2丁目1-9
 TEL 0177 (76) 1551 (代)

